印度義志

4波八
1117
2

函 11
號 10
114
門波
號 117
卷 2

京都帝国大学図書之印

印度藏志卷之二十二

大壑　平篤胤撰述

泉之屋文庫

○印度傳通品二第二十二

此品ハ仏滅後第四百年初より第五百年中ハ至る間ニ于健馱羅国の迦賦色迦王と云しが説一切有部の古説を結集せる事ゝ次ハ小謂ゆる小乘の諸経論とも六足発智大毘婆沙四阿含抔どの出来し時代ハ其経論とも小執て心得居き要事を因ゝ小考ヘ注せるなり

一西域記云。仏涅槃後。四百年初。健馱羅国有王。名迦賦色迦。尊重仏法。味道忘疲。傳燈是務。日清一僧入宮供養。王因問道。僧説莫同。王甚怪焉。問脇尊者曰。仏教同源。理無異趣。諸德宜唱異有異乎。尊者答曰。如来去世歳月逾邈。弟子部執師資異論。各執聞見

共為矛盾。王聞已甚用感傷悲嘆。良久謂尊者曰。渚部亥範孰最善耶。我欲修行。尊者答曰。渚部懿典莫越有宗。王欲修行。宜遵此矣。王曰。向承嘉旨。以有宗。此部三藏今應結集。須召有德共詳浅之。

迦膩色迦王は。倶舎論の慧暉法師。此云淨金色王とあり。此王が仏法に入る始末の事も。西域記に。北印度境健馱羅国。東西千餘里。南北八百餘里。東臨信度河。国大都城號布路沙。周八十餘里。城外東南八九里。有毋鉢羅樹。高百餘尺。枝葉扶疏。蔭影蒙密。あの樹の事を。第五巻に既に釋迦如来の此樹下に告阿難曰。我去世當四百年。有王號迦膩色迦王。北南不遠起窣堵波。吾骨肉舍利多集此中。其樹南有窣堵波。迦膩色迦王之所建也。あの仏祖が應記を。下文の小竪が妄延の吉凶を見る後に作れる應記なり。下に云ふを見るべし。迦膩色迦王。以如来涅槃之後第四百年。君臨膺運。統贍部洲。不信罪福。軽毀仏法。畋遊草澤。過見白兎。王親奔逐。至此忽滅。見有牧牛小竪於林樹間。作小窣堵波。其高三尺。王曰。汝何所為。牧竪對曰。昔釋迦仏。懸記當有国王。於此地建窣堵波。吾舍利多聚其内。大王名符昔記。況此治己忽然不現。法顯傳小は犍陀衛国。膩伽王。出行遊観時。天帝釈欲開発其意。化作牧牛小児。以故事を記せり。王聞此。浅喜慶自負。其名発正信。深敬仏法。建基趾。周一里半。高一百五十尺。窣堵波。其上更起二十五層。金銅相輪。即以如来舍利一斛。而

過作過恐誤
過敬

置其中式修供養営建終説となる。吹を是王が仏法を信じ初しる因縁あるが其ゆ
竪を疑ふくかの幻通あるも比丘の化しるゆて憍紀も其が
方便の妄誕あり。法顕傳ゆ天帝の化しる畏云ふれど其は
論ふゆも見られず。斯て文の初先て仏祖が阿難はちうく計
分別と有るは化物の妄憍紀ありて後ゆそを上て及がし
て紀せる文あはこと上て論へる阿育王が憍紀ゆ思ひ合
セて辯ふ陸し比丘らの深く仏道を得るは能く化る物
あること既ゆ奪く論へるか如し。○日清一僧云し。如此して仏道を問ふゆ。
其僧ゆと云ふ説法の異形るを甚怪めるなり。其は此頃已て
其道二十部ゆ分別して。各宗ゆ立る所あるゆ上て。ロ授闇
涌の説多く。各くその傳涌せる所を正とし。別ゆ憶断自見
の契経等をも紀載し出て張行せる故なり。○脇尊者と云
ひし比丘が事は。倶舎論の順鱗紀ゆ。脇尊者梵言波栗濕縛。

唐云脇尊者。初為梵志師也。年垂八十。捨家入道。城中少年便
消之曰。愚夫老朽。何洩智夫出家者有二業。一則習定。二則
乃涌経而今衰老無所進取。遊迹清流。徒知飽食。時脇尊者聞
諸譏嫌因謝時人。而自誓言。我若不通三蔵理斷三界惑。得六
神通具八解脱。終不以脇而至於席。自爾之後。唯日不足。経行
宴坐。仰思惟。晝則研習理教。夜乃静慮凝神。綿歴三歳。学通
三蔵。斷三界欲。得三明智。時人敬仰其德。因號脇尊者。与ひ
ひ。西域記ゆ載せるも同説なれば校今こを引とり。仏法藏傳ゆ
茅八祖仏陀密多と云ふが茅子なりと為て。茅九祖脇比丘
尊者。中印度人。由於昔業。在母胎六十年。既生須髮俱白。厭患
五欲不樂家居。其父攜見密多。曰。此子處胎六十年。因号雞生。
曾遇捫者言。是法器。頓求出家。受戒之日。祥光燭座。感舎利三

七類、便ち座上に得阿羅漢果、精進苦行、服不服比丘とあり。合せ見る時、是時しも服比丘は、上座一切有部の長老ふして、行徳の名高うまし故ふ、仏教をもと同源ふ出れど、異異趣有りまし、理あるふ、諸僧の宜唱せる教説よ異ゞ故ゞ異説あると問ふあり。此王かの二十部北起れる由縁、おゝよ異異部の宗輪をよ知さる故の問ゞて、宜なる言あり。○答曰、如来去世、歳月逾邈なくは、上件しふ注冥ふ如く。仏滅よ此四百年初の時よで。總ゞを三百二三十年を経ある間ふ。二十部ふ分れ。其苗裔の弟子ども其部しふ執し。加之師資らの異論あり。各々その聞見を是と為る故ゞ宗旨ゞ相違とあり。信よ此比丘ゞ答と。上件しある諸部の異説の區なるを以て知るべし。○諸部主範執最善耶云しは。服

比丘ゞ言を聞て、始めて諸部の分別ある事を知れ。ゝ之一仏祖よ出る説の。然る異論乎相乎生じる事を感傷悲歎して。我その真説よ依れて修行せむと思ふを。諸部の主範の中ふ。孰ゞ仏祖の真説あると問ふ形れ。是ゞ滅よ然もある時き問條ふ。○諸部懿典莫載有宗云しは。諸部懿典と有れど。彼大天ゞ五事の淨論ふ出し以来。ふの時まで。諸部ふて其々ふ。彼此と紙葉ふ記せる。契経の出来しふと所知れ。其上の件々よ引しる諸部の宗義を。宗輪論ふ出せるを以て。察る法し世友ゞ當昔ゞふの諸部の主説を。ゝ之く記せる経論の毎りせ然しも記し出ぬ事有ちぬ事。前巻の末なる頌ふ。依自阿笈摩説彼執と有るも。自他の経論を對考して。記せりと聞ゆるゞ思ひ合せて辨ふべし。然れど。其諸部の謂ゆる懿典どもの

中ニ一切有宗の説法。ハ此仏祖の正流なれど。其契経ニ越
あるは無し。王もし真の仏法を修行せむと欲さば其有宗
の説ヲ導び給ふと云へるなり。抑この比丘も元より一切
ヲ依る所は部執して。餘の諸部の宗義をば。貶斥せる如く
思ふ凡人も有れども。此を実は仏法の公論ニて。偏
頗の浅ニ非さるなと。上の條ニ
論ずるヲ思ひ合せて解ふべし。○王曰。向来嘉旨示以有
宗云へは。汝比丘が言を聞て。始めて真の仏説を。一切有宗
ニ有ル事を知ぬれは。有徳の僧等を召集ふて浮説せしめ。
此一切有宗の三蔵を結集して。此宗旨を以て世ニ示さむ
と云ふ所なり。

二 於是王乃宣令遠近召集聖哲。四方雲集。英賢畢萃。凡聖極衆。遂
簡凡僧。唯留聖衆。聖衆尚繁。簡去有学。唯留無学。無学復多。不可
總集。於無学内定満六通。智圓四辯。内国三蔵。外達五明。方堪結
集。故以簡留所簡聖衆四百九十九人矣。王曰。此国暑濕。不堪結
集。應往王舎城中。迦葉結集之處。不亦宜哉。脇尊者曰。王舎城中。
多諸外道。酬答無暇。何功造論。迦濕弥羅国。林木鬱茂。泉石清閑。
城唯一門。極堅固矣。可結集矣。
仏法の古義ニ於ては有学と云ふを畢しみ。無学果と云ふ
を尊しと為る事を。前の三蔵結集品ニ既ニ委く説くり記。
無学の梵語を阿羅漢と云ふ。委くは三
蔵結集品ニ立ち帰て流して知る所し。六通。四辯。五明の事
も上の品くり出しぬれど。此ニも其大概を注さむニ。六通と

は六神通とも云して。天眼通。天耳通。他心通。宿命通。如意通。漏盡通あり。三藏法數に、一、能見六道衆生死此生彼苦乐之相及見一切世間種々形色無有障礙是名天眼通。二、能聞六道衆生苦乐憂喜語言及世間種々音声是名天耳通。三、能知六道衆生心中所念之事是名他心通。四、能知自身一世二世三世乃至百十万世宿命及所作之事是名宿命通。五、身能飛行山海無礙於此界没彼界出於彼界没此界出大能為小小能作大隨意変現是名如意通。六、漏即三界見思惑也羅漢斷見思惑盡不受三界生死而得神通是名漏盡通と云へり。○四辯とは捷辯。迅辯。應辯。無礙辯を云ふ。此も同書に渚法の名字分別に通達して滞りなく捷こと影響の如きを捷辯といひ事理に明かして心に疑晴なく善く機縁に赴て迅問に随ひて即答へ語言の迅疾なきを迅辯と云ひ一切の文字名句を以て種々の法語を荘厳し時に應じ機に應じて差異有ることを無礙辯といひ一切衆生の根性の用法答窮まる事なき故に應辯といひ一切衆生の根性の用法セむと乐ふ所に随ひて道を説く事皆眞理に契ひ違ふ所なく毎時謬辯と云ふと云へり。○五明

とは。一に声明。二に医方明。三に工巧明。四に因明。五に内明を云ふ。此事も同書に世間の文章算數建立のいひ世間種々の言語及ひ図書印璽地水火風万法の因を善く明了に通達せるを声明と云ひ病癲痢蠱毒四大の不調鬼神呪詛及ひ寒熱の諸病を悉く其因を暁了して通達對治せるを医方明といひ世間の文詞讃詠或は城邑を営造し農田すゝ音乐ト算天文地理一切の工業巧妙に善く通達せるを工巧明と云ひ持戒を以て破戒を治し禅定を以て散乱を治め智慧を以て愚癡を治し種々の染淫邪正内外生死涅槃對治の法に通達せる智を因明と云ふと云へり。内明とは諸の法を明了に通達せる智を内明と云へり。斯の如き事どもを兼明せる比丘と。四百九十九人を簡ひ定めらるる由あり。其中に服比丘もあるかと言ふも更なり。

於是王及聖衆到波国建立伽藍已。縁少一人未滿五百欲召世

友然世友識雖明敏未成無学衆欲不取世友顧重衆曰我見羅漢其猶洟唾志求仏果不趨小乗況尊此業我乎我欲證之擲此縷丸未墜子地必當證得無学果也時諸羅漢重河之曰増上慢人斯之謂也無学果者諸仏所讃宜可速證以決衆議於是世友即擲縷丸空中諸天接縷丸而語世友曰大士方期仏果次補涌勒三界特尊如何為此小縁欲捨斯大事於是重衆聞此空言頂禮世友推為上座凡有疑議咸取決焉

彼国とは即迦濕弥羅国を云ふ此を既に出あり○少一人未満五百云々は五百人に一人足らざる数にて此を舊く彼国にて〻〻る人数を簡ぶ時の事を云ふ例文のごと聞き

そは第一時の結集に一人を少くるを阿難を加へて人数を整ふ第二時の結集に一人を闕あるし子富闍蘇弥羅子加れて人数を満しるるなり此第二節の注に引くる文の如くなれば此を深く拘るべき事にも非ず然れど毎事かくの如く物を拘る事なくいと拙なく煩はしき文法にて其加不加を論ずる人は何ほども必其人無くては事成ましき要用の人なるも多をうし○世友を即宗輪論の撰者にて前品に出づ然て是世友が擲ちる縷丸の地に落ざる間に無学果を證ずと言ひ空中に諸天ありて云く〻と語ある由云へるなどは大乗の説起りて後に加増せる例の妄説なり拘はる事勿れ然るに此丘に始めて菩薩と称し仏第子の最第一の位とせる羅漢果を成ぜる事を洟唾の如しと斥けまし〻空中おそし

諸天の訳として、大士と呼しめ、次て弥勒又補処と云くと有る小心を着てこれる法し、それ弥勒トハ物のこと上ふも下ろも辯才あるを思ひ合セむ小法、此流等は大乗家の妄誕なる事、自然うらふ著明なるを知ぬそれて此世友論師を上座と志て、五百人の員数全く具はる也、斯て是比丘らが事を、西域記健駄羅国、波羅覩邏邑の所ふ、如来去世垂五百年有大阿羅漢、自カ迦濕弥羅国遊行至此、て、其が物語を載せる小、曩者南海之濱有一枯樹、五百蝙蝠於中宅居有、諸商侶、止此樹、屬風寒、人皆飢凍、聚積樵、蘇薀火其下、煙焔漸熾、枯樹遂然、時商侶中有一貧客、夜分已後、涌阿毘曇藏、使諸蝙蝠、為大因、愛好法言、忍不去、於此命終、随業受生、俱得人身、捨家修学、乗聞法色、聰明利智、並得至果、為世福田、近

迦膩色迦王、與脇尊者、招集五百聖衆、於迦濕弥羅国、作毘婆沙論、斯並枯樹之中五百蝙蝠也、余雖不肖、是其一数、と云へること所見なり、然れども世友脇比丘を始め、此時の五百比丘は、みな蝙蝠の化生ふで有りける、但しそは何してせふ幼ら何れも渭由さる宿命智をもて知りと答ふむ、然も有ら、其四百九十九人の比丘ら、何どて、世友も其倫ちなるし事を知らて、始めて彼を拒みりも、其六通を得りとえふ、羅漢比丘とも有らぬ移しき事ぞと云むふ、護法の比丘ら、も答ふる辯有おぐしく、然れども、然れども五百人の員数、及び六通四辯辯明のこと、又かの拒める時の議論ちどは、然しも拘けるふ、疑ぎる説ぞ、ちるる事いよく益し、灼然なりかし、

於是五百聖衆初集十万頌釋素怛纜藏、次造十万頌釋毘奈耶藏、後造十万頌釋阿毘曇藏、凡三十万頌、六百六十万言、備釋三

藏。懸諸千古。莫不窮其枝葉。究其淺深。結集既已。王遂以赤銅為鍱。鑄寫論文。刻石立誓。唯聽自国。不許外方。不令異学持此論。即今大毘婆沙論是也。

凡て今の本文と為る西域記の文を今の要とする事をば皆省きて。間々倶舎論頌疏に引るを校合して挙る。抑この時の結集はしも。如葉等の結集の時。おし彼郭舎陀。再度の結集の時とは様替りて上に云へる如し。此わど既に諸部集しに。契経の記せるが出来して用ひられず。律藏論藏の書も且しは出来に成むを。此時に善く上座一切有部の。根本宗旨に叶ひるを撰びて先その三藏の本籍を撰定し。然して後に。其撰ばる三藏の。根本説しる所以此論頌を造あり。其を集十萬頌釈素怛纜藏云へる様に。三藏とも釈と云へるにて知られし。其をもし此時なれば三藏の本籍の紙葉に載せるが無ちむことを思ひを潭めて解ふ法し。新て其頌を三藏とも云ふ十万頌と云ふる。例の大数をる。常例のおひ様なれども。是は拘はるに足らず。唯に廣博なる事と見て在る法し。其をかの土百の蝙蝠僧らが。漢口月心よ。一藏に一頌なる唱へ出しに。三藏にては。凡そ千五百頌三万三千言あるを思ふ。況なり。○懸諸千古と云より。不令異学持此論と云ふは。洋に開ける文なるべし。注せるに及ばず。その四濕体羅国を以て。總て僧徒に施し。新神に命じて。其城門を守護せしめ給と有るは。其城門なかのカ士神の像を造り立

とる義なり。然も此王が死んる後に、沱利多種とて、甚く賤し。此族の者この国を推取りて王となり、其僧徒らを遂に滅ぼして、仏法を毀壊せる事なども記せり。委くは本書に就て見るべしとて此謂ゆる三十万頌。六百六十万言の論頌を。即今大毘婆沙論是なりと有れど。此を玄奘が甚し紀謬りの説なりとて。今傳はる大毘婆沙論を。此時の説なりは非ず。仏滅より九百年あまり後の物なり。抑是時の論を。例文ながらも。三十万頌。六百六十万言と云へる許なれば。決めて廣漠なりけむ。其は早く滅びて。今傳はる阿毘曇心論と云ふもの。疑なく其捷概を録せる物なり。然るは此論和訳の四巻なれど。信に三蔵を釈せる論の大概を案るに足る物にて。巻首に。尊者法勝造と有るが如し。此は東晋のせに、罽賓国の沙門、僧伽提婆と云ひしが、遠と云る比丘と共に澤せる物なり。其品、行品、業品、使品、賢聖品、智品、定品、契経品、雑品、其は彼凝然の仏法縁起に。七百年時、法勝羅漢、婆沙大博、曇摩耶、作二百五十偈、名阿毘曇心論、澤成四巻、又千年間、達磨多羅尊者、以婆沙大博四巻、極畧更撰三百五十偈、足前四巻、合六百偈、名為雑心と云へる字思ひ合せて解ふ所し。此は内典録、及び開元頃の釈教録なども、謂ゆる説を集めて記せるふて正説なり但し凝然も、婆沙の要義を畧撰して云へる婆沙を今傳はる大毘婆沙論の事ぞと思ふる趣なれど其も覚えず古人の謬れる多数なるなり。七百年時とは。六百年をすぎて。七百年おての間をいひ、千年間とは、九百年を過ぎて千年までの間をさふ。諸の同書に、九百年時、達磨多羅造雑心論とも云へり。西域紀に健駄羅

国の所ふ。城北四五里有り故伽藍。即達磨呾羅多論師。唐に法救と曰ふ達磨多羅と訳す也。此製雑阿毘達磨心論と云ふ。阿毘曇と云ふは同じ。凡て達磨を切めて曇と云ふは常の事なり。此を略して雑心論と称する也。巻首に尊者法救造と有るが如し。はは劉宋の世に天竺沙門僧伽跋摩と云ひしが譯する十一巻なり。此を前の阿毘曇心論を釈したる論なり。其は序品の偈序品と擇品と二品を加へて十二品となり。其は序品の偈に敬礼尊法勝所説我頂受と云ひ。文に依て阿毘曇毘婆沙所應故大徳法勝。及我達磨羅芠莊厳と云ふを以て。是時の毘婆沙に依て。法勝が阿毘曇心論を造る。法救はその法勝が論を奉じて。此時の婆沙の遺説を莊厳せり。と云ふ意いと炳乎に知られたり。此法救は五事毘婆沙論と云ふを造れり。其を次

條に云ふを然らば今傳はる大毘婆沙論を是時の論に非ずと云ふこと。何を以て知ると云ふに。吾は此論二百巻の全書を眼を開き讀みて知りしなり。其は第六條に論ふを待て。阿毘曇比丘らもまた善く眼を開きてみる故し。

五 仏滅後。五百年中に有阿羅漢。名迦旃延子。先に薩婆多部に出家。本是天竺人。後に往罽賓国に。与五百阿羅漢及五百菩薩。共に撰集。薩婆多部阿毘達磨製為八伽蘭佗。即此間に八犍度伽蘭佗澤為結也。

此條及び次條に。世親菩薩傳と云ふ物に採りて載せり。此を一に婆藪槃豆傳と云ふ。婆藪槃豆を訳して世親と云ふなり。陳の真諦が翻訳して一巻あり。蔵経の傳記部に入

より。けて五百年中とは仏滅より四百五十年頃をいふこと。上件くの例の如し。皇国に崇神天皇の御世治し給せる十年頃より當り渚載に漢の元帝の初元永光の比より當る歟し。○有阿羅漢名迦旃延子とは。彼四果の中の最上なる。阿羅漢果を得たる人の義なり。仏祖の十大弟子の中より。大迦旃延子といふ人あれども。其とは元より別人なる事いふも更なり。此を辨りて。同人と為る説も彼此あり惑ふこと勿れ。名義集に。羅什曰。南天竺婆羅門姓也。善解契経者。淨名疏に云。此翻不定有。云扇繩。有云文飾。未知孰正。とあり。なほ下に引く西域記より迦旃延といふは。沈より迦多衍尼といふを正と為せり。○先於薩婆多部出家とは。上座一切有部にて出家せる由なり。前品の第九條に引くる述記の或説に至三百年初迦多延尼子出世。於上座部出家。先弘対法。後弘経律。と有るも同人なれど。其は述記小。此時迦多衍尼子未必生と有る如く。沈傳に。○未是天竺人。後往罽賓国。云ふことは。本は南天竺の人なるを。往て住せる由なり。罽賓国とは。本書に。在天竺之西北と見えたり。即上に出くる迦濕弥羅国なり。其を西域記に。迦濕弥羅国舊曰罽賓。訛也。周七千餘里。四境負山。山極峭峻。雖有門徑。而復隘狹。自古隣敵無能攻伐。国大都城西。臨大河。南北十二三里。東西四五里。伽藍百餘所。僧徒五千餘人。有四窣堵波。並無憂王所建也とあり。玄奘傳に沈と同じ。但し玄奘は罽賓とあり

を沉也と云ふ。其後の書籍にも皆闕賞とかゝゝひて迦毘羅国とは云ハぬる形ぞ。○与五百阿羅漢及五百菩薩共とは阿羅漢を仏弟子の上果。菩薩を在家の覚衆生を称する古実小叶ふる文言なり。然るは迦旃延子は阿羅漢果の人にて。撰集の上首と為て其餘五百の羅漢ども。及び五百の菩薩らを手役はしめて製せる由なり。然れども其数を各く五百と云へるを例の如く然れども其菩薩ども。文格なるべき。元より拘はるゝ必要ら家拘はるゝ必要ら家。ミな羅漢比丘らの下座に物せること。最清ゆゑ有けるゝ。かの赤保くよ。維摩経序分の列衆に比丘らを先ゆし。菩薩を後ゆせるを。羅什法師の推と云へるも菩薩を戒後なるゆゑ故なり。世俗多くも信ぜざるし故なり。とこへるを思ひ合はゞし。○薩婆多部を説一切有部。阿毘達磨は阿毘曇とも言ひて論とも対法とも澤

ゝる由を既に出しより。撰集とは。その説一切有部に有来れる論等を殊に撰集して。八つの伽藍陀に製し為せる由なり其本論どもは下に論文の八足論の類なる例し。○即此間に八犍度を。伽藍陀を梵語にして。犍度を其澤語の如く聞ゆれども。此は文辞の恕化なり。然に非ず。犍度伽藍陀とも同じ笠語の轉化なり。然るに此傳の沢者真諦より。旧く渚載よりは八犍度と唱へ来れる故よかく云へるなり。○伽藍陀澤為結は。梵語に犍度とも。伽藍陀とも云ふを翻澤せれば。結の義なる由なり。因て聚とも澤セり。斯て是八つなるが故に。八結とも八聚とも称せり。三蔵法数に梵語犍度華言法聚。名八犍度論と有るを思ひ合せ。名義集に犍度正音婆犍図。此云法聚。如

八犍度。以分一部為八裏故。以気類相從之法裏為一段。段下八業
犍度明三業。二使犍度明百八煩惱。三智犍度明十智。四定犍
度明八定。五根犍度明根性。六大犍度明四大。七見犍度破六
十二見。八雜犍度謂小乗法とあり。但し此の八犍度の名目
論発智論を見るに及ぶと無れど。手近くは三藏然して此
法敎ずゝ大藏法敎ちとを見ても知る事形る。
下の大論云。問。八犍度誰造。答。阿毘曇從何處出。答。仏滅後
百年。阿輸柯王會諸論師。因生別部。有利根者。欲解仏経作八
犍度。其初造者。即迦旃延也と有り。此も本書大智度論をも
て。今の用ひる文をの
と甚く切めて抄せり。西域記。北印度境に。至那僕底国の
所の大城東南行五十餘里。至答拂蘇伐那僧伽藍。此言園林。
僧徒三百餘人学説一切有部。釈迦如来涅槃後。第三百年中。
有迦多衍那論師者。舊曰迦旃延也。於此制発智論。事と有る発智
論。やがて此八犍度論なり。其を凝然の仏法縁起に仏滅後
三百余年迦多衍尼子造阿毘曇
八犍度論と有るにても知る。但し西域記。縁起とも。三百
年と有り。諸書に多く此年敎を用ひしれと誤なり。其を
上に引る述記に。此時迦多衍尼子来。必生と云へる如く。年
敎うち合ぬる物をや。諸書の西域記の文。通本に誤字なり
今を去特が傳子
授して引と云。
処出と有るを。謂也る六足論の出処を問る。浩なるが。八
犍度論の事を論ふに。乾ては。先此の諸論の事を知べき有
ばうらに。大論に其説有れと文繁うれば其は措きて。近く
俱舎論頌に。諸論とある処の疏に。諸論者一舎利子集異門

足論。二、大目犍連法蘊足論。三、迦多演那施設足論。已上三論、仏在世造。の三人の比丘なりは。謂ゆる十大弟子の中に。も。上首の者なり。形ちと。既に往く云へるが如し。陵と此中に迦多演那と云へるは。即謂ゆる大迦旃延なり。今の八犍度論を造れる迦旃延子を。まことに迦多衍那と云ふなり。思ひ混ふ仏涅槃。後一百年。中提婆設摩造。識身足論。至三百年。初世友造品類足論。又造界身足論。至三百年。末迦多演尼子造発智論。前六足論。及門稍也。発智一論。法門最廣。後代論師多宗。発智。大毘婆沙論依之而造。とあるをまことに思ふ法し。仏法縁起。薩婆多宗根本有七論。発智為身六足為足と云ひ。倶舎論の光記。宝記。並に云く。上の七論。是説一切有部根本論也。和上唯施設足論。未翻。餘之六論。皆並翻訳と云ふ。和上とは玄奘を云ふ。施設足論を。沃本ちき故に経蔵目録に出さず。外の施設論と類せるゆゑ。有れども。授者の名もなく謂ゆる施設足論とは別なり。此論をも大毘婆沙論なども。唯に施設論とも云へるを以て。然れども。此渚論の出来て月書なりと思ひ給ふ。色からも。し時代を。云へる説を信ぜられ。更に其の集異法蘊。施設足の三論を。仏在世造と有るが中の施設足論を。今傳らざる故に知ぶ。集異法蘊の二論は今傳はるを視るに。仏在世に。舎利弗。目連らが造れりと云へること。全信ぜられ。其は。まことに集異門足論を。其は阿毘達磨集異門足論と云ふ。また説一切有部集異門足論とも名く。巻首に尊者舎利子説と。また。玄奘比丘が譯ふて二十巻あり。十二品に別ると。此を疑ふ。長阿含中に收まる。集衆経と。十上経とを合せ取りて。其法門を大に敷演して。後人の作に。暫多る物なり。然るは其集衆経の初めに。一時仏於末羅遊行与千二百五十比丘俱

漸至波婆城闍頭菴婆園ニ云フコトヲ録シ。其説法已ニ終テ後ニ。舍利弗ニ。吾患背痛。欲暫止息。汝今為諸比丘説法ヲ勸むるよ。舍利弗諾して。一法より十法迄ぐ。種々ニ増一法を説くると見え。十上経も。其説法の場所ハ異れ。同じ類ニ吾患背痛。欲少止息ヲとて。同人ニ代講し如ハ。一法より十法まで。各々一を増して十ニ至る。其ニ五百五十法を説くと子。仏祖ガ印可セる由見えたり。因ニ藏経中ニ、仏説大集法門経とて二巻ありるを。集衆経の別訳なりまし長阿含十報法経とハ二巻ありこれを十上経の別訳ありて。其ニ今の二経と同じ類あり。然て集異門足論ハ。初品縁起品ニ。世尊一時遊カ士生處。至波婆邑。住折路迦林。時告舍利子。吾今背痛。當寢息。汝代吾為説

蔔。宣説法要。時舍利子默然受教。告衆言ヲ録し出て。終ての讃観品ニ。仏讃舍利子。善哉善哉。汝今善能結集如来所説増一法門ト印可セれぬ。諸説蔔ども聞て歓喜奉行とあり。カ生處とハ上の集衆経ニ末羅とある地名の澤治なり。波婆邑を波婆城。折路迦林ハ闍頭菴婆園の轉治なり。是ハ集衆経を取れること灼然し。斯て一品より十法品まで。二百十餘門ニ別ち凡て問答の躰ニ作れるガ。告衆言とハ有れど。目前ニ集牙る。衆人ニ渝せる文格ニ非ざるな。此作者ガ文の麁漏なり。カ如其立法品ニ。問。尊重有智同梵行者云何。答。舍利子。大採菽氏大迦葉波。某々等皆名尊重有智同梵行者。問。法云何。答。名身。句身。是名為法云々形ばかりあり。舍利弗ガ當昔の自記

なら如し。自かく尊重有智としも云むや。仏祖よりして自ら尊大誇を
称せるは、仏法者の常なれとも、仏祖の在せるとしも同を其
弟子どもかく自尊大ぶは称せぬ事なり。此論の作者も然
はなりの事を知りて在めれど、第ふ了此論を舎利子ぶ造
ふ託をとはなく、只了彼二経を布演して、作れる論なるを、
後人その舎利弗が名の見えくるを、能くも其作意を尋称
ぜ、謾ふ舎利子造と定めしを、玄奘をはじめ後の比丘らも
深く此偽を辨ずず、雷同して、舎利弗が作紀とめ心得来
ふれど、其を他なし。和漢古今の比丘ら盡く懸空涯妄の説
りのみ長じて、曾ても殊故を識ぶる眞字を知ざる故なり
此事なか新婆沙論を論ふ所ふを、合せ考へて辨ふ
なし。殊ふ其論中ふ法蘊足論を多く引くるは、彼論ありし後
世人の撰なること、更ふ論ひ無ふ物明ぶかし。尚く一切経蔵中ふ舎利
弗阿毘曇論と題せる、二十二巻三十三品の次了法蘊足論
論ふれど、是ふ、舎利弗ふ偽託せる物なり
を、具了は、阿毘達磨法蘊足論といふ。まし、説一切有部法蘊

足論とも名く。巻首ふ、尊者大目乾連造とあり。玄奘が譯ふ
て十二巻なり。二十一品ふ別くり。唐沙門靖邁が後序ふも、
大目建連の所製矣といふ
牙ふ。文中ふ、目乾連といふ名は一所も無く、尚く、彼比丘が造
と覺しき文も有ることも無く。初品より第二十一品まで品ご
とふ。一時薄伽梵在室羅筏住逝多林給孤獨園。爾時世尊告
苾蒭衆云々とある故ふ。仏祖の自説ふと見るも了。鷹喩経中
仏作是説云々。涉底経中仏作是説云々。如契経説。尊者慶喜。
告曜史羅長者言云々ふも有れど。總ては仏説なら了。いと
不解義なる物なり。なお満月経・大因縁経・頗勒寞経・取蘊経・
六處経抄とふを引くるが、皆此類
ふ云ふ了殊了目乾連ふ在世の時頃ふ。かく引出る仏経論を有

ありと無れども。世は紙葉に載せる契経の。次々に出来し後世人の撰なるを。目犍連が造と混て来れるぞ有りける。然れども集異門足論よりも前に出来しこと。彼論次に識身足論を。多くその法蘊を引しるるまて論なし。

又は阿毘達磨識身足論とも云ふ。尚〻説一切有部識身足論とも名く。巻首に提婆設摩阿羅漢造とあり。玄奘が譯ふて十六巻あり。六品に別しり。是も仏涅槃後一百年中に造れりと言ふも信られぬ。其は此間いまだ契経さへ。紙葉に載せるが無し時なるまで。況て阿毘曇を紙葉に載せ侍る時に非ちぞ。然るを大毘婆沙論の第百十九巻に。契経是此毘曇は有為無為道理なりとある如く。契経の法教ありてこそ。阿毘曇をば思ふべし。然れども此を。諸論の中には最舊なれど。紙葉に載せるが論ひなし。然れども其論根本とする所もちきは。是こそ諸論中に。最古なる侍き。況る論なる集異法蘊の二論。

もし信に仏在世より有りなば。仏祖が十大弟子の中に。上足なる舎利子目連が。仏祖の印可を受〻まとこそ云ふ。阿毘曇の古書なれども。必ず引ぎは有まじ。況事なるに。彼二論の流を襲ける文の無をもて。識身足論よりは。彼二論の却て後なる事を。悟り知侍し。或人問。識身論も前なる。ならば。彼二論に。答。そも彼二論を。共なる仏在世の造に。然らば集異門足論に。法蘊足論を引しるる如何。答。同じ。及ぶ侍き。法蘊論は

前に作り。集異論を後に作れる故なる事明らかなれども。互に嫌ひ隔てき故なりかし。次に仏門二人の上足なれども。互に嫌ひ隔てき故なりかし。次に品類足論を。異には阿毘達磨品類足論と云ふ。また、流一切有部品類足論とも名く。巻首に。世友等者造とあり。玄奘が澤して十八巻あり。八品に別つ。西域記健駄羅国の所に。城東有窣堵波。世友論師於此製衆事分阿毘達磨論と有るは。即ちこの品類足論なり。蔵経中所説の品類足論の外に。衆事分阿毘曇論と。法蘊足論と。施設足論と。識身足論と。界身足論と。陀羅尼菩提耶舎と。澤すと云へるが。十二巻なるが。此を世友が造と有れど。品類と同本異出ふして異本なり。

云ふと。然も有ばかれど。三百年の初と云へるは信られ難し。其は四百年の初に。健駄羅国の迦膩色迦王が。三蔵結集の時の上首たる世友なれば。其時百五十歳ならんか。年数合はず。当昔世友は然る老比丘として聞えず。三百年初を必ず四百年初の誤傳なるべし。上に出せる彼結集の時の趣を思ふに。当時世友を菩薩と尊ぶ故に。餘の比丘等よりは。却りて都比丘たりし故に。人の貶しめあるの趣に聞こゆるをや。

扨て此論の辨千問品と云ふに。十八界経。謂頌中前九後九。各總為一合。有二十経。依一一経。為前五十問と云へる語も有れども。識身足論の出来し頃よりは。契経の紙葉に載せるが猶多かりげに聞えしかども。然れど経々の名を一つも見えず。其は四阿含中なる数多の経名は悉後に撰集せる徒らに心を事をなふ所に。委しく論ふをミル所。次に界身足論を。其は阿毘達磨界身足論と云ふ。皆流一切有部界身足論とも名く。巻首に世友尊者造とあり。玄奘が澤して三巻にするを二品に別つて。是も世友が造と云ふこと怒も有らむ。

但し大毘婆沙論は。前の五足論をば。数所に引くれど。此論を引くる所無きを。不審し知事なり。おもうに是に依りて思ふに。此は大毘婆沙論なるべし。其を上の品類足論の辯五事品をかの雑心論を作れる法救が釈せる。五事足論の事のなきを思ひ合はせば。此異身次に発智論を見るは阿毘達磨発智論とぞ云ふ。因に説一切有部発智論とも称す。巻首に尊者迦多衍尼子造と有り。玄奘が譯して二十巻なり。八品を別に。其八品を即ち謂ふ。犍度として。雑蘊・結蘊・智蘊・業蘊・大種蘊・根蘊・定蘊・見蘊の八品なり。亦是より前。等巻の僧伽提婆と云へる人翻譯して。阿毘曇八犍度論と題せるが三十巻有れど。譯の善らぬ由なり。玄奘が因に更に譯して。発智論とは號けし故に。其八犍度論も一切経蔵に入りて。今は傳はれど眠を惜む人なれば。其を読むことも在り難し。此を此発智論に見れば。経名は無れど。契経説。世尊説と云へる引くるが多くを見るに。阿含は経に載る説等の多く見るは。記せる経の益々殖えぬ故なり。然るに其経名を記げるは。当時にて然も出来れども。舊説の習風の因に。唯に契経とのみ称して。各に某々と名付題ざせし故なり。然るに法蘊足論は。七経説なりの名の題へあるを彼論は。発智論よりも後に作れる故なると著し。集異門足論は。法蘊足論を引かれだ。猶後に作れる故なると著し。集異門足論の作なること云ふも更なり。然れば右六論の出来し次順を。因に識身足論ありて。後に世友が品類異身の二足論作れる。次に発智論出来て。後に法蘊足論あり。此論有れし後に。

集異門足論を造り出しを。其後の人ハを舎利弗が造と志て。諸論の上ニ今立あるなり。其を後論の次々ハ高上ニ成行ける趣を以ても推量られ申。然れど此を吾等が古学の眼をもて視しる説ニ成ハ有ハ。仏胃内ならむ徒ハ永セて上ニ引しる俱舎は斗〳〵何なる獲法言をうさつらむ。けて上ニ引しる俱舎論頌疏ニ。前六足論、毘門稍ハ。発智一論、法門最廣。後代論師多宗發智。大毘婆沙論依之而造と有るを。実然る事ハて。今在る大毘婆沙論。やがて發智論を廣説せる形ニ。其は次條ニ云ふを見るべし。

六 迦旃延子。既造八結竟。復欲造毘婆沙論釋之。馬鳴菩薩是舎衛国婆枳多士人。通八分毘伽羅論及四皮陀。迦旃延子。遣人任舎衛国。請馬鳴為解八結義。意若它。馬鳴随即著文。経十二年。造毘婆沙方竟。凡百万偈是也。

此條ハ世親傳の前條ハ接せる説を採れるハと。上ニ云へる如し。但し発端の五字は。今已〻加へあるなり。其をかく二條ハ引放ち載ハとしてを。若ハ足ら採ぬ形り。○既造八結竟云くハ。発智論を云ふ。結ハ犍度の澤培形るハと既ハ云へり。梵語ハ。犍度とも伽蘭陀とも云ふ。頌裏の義なるを。此論を。法蘊を八種ハ分類せるが故ニ八結とも。八蘊とも。八裏とも諸書ハ訳して。其訳せる書を発智論と号けしを。此を学ぶで発智を意なり。けて其八結の論を造ル竟を。復其が毘婆沙を造て。其義を解釈せむと欲する由なり。○舎衛国を。西域記ハ。室羅伐悉底国舊曰舎衛国。訛也と有る国ハを。此国の事

は。仏祖生涯の品々小數所々出たり。婆枳多士は。其国の小地名と聞えたり。此馬鳴が生国を。諸書に或は東天竺と云ひ或は西天竺といひ或は北天竺といひ或は中天竺と云ふ。鳳潭が幻虎録に。其説説を挙て。未詳何是と云へるも実に然る言なり。扨て此馬鳴と云ひしは。付法蔵の第九祖と称する。彼脇比丘が弟子。十祖富那夜奢と云へるが弟子にて。婆羅門種の人なるが。後に付法蔵の。十一祖と称する人なるなり。下に引出る書等のごとし。竺法護の所説縛婆沙と云ふるを。説して馬鳴と云ふ。此名の由縁を云へる説に。或は前世に昆舎利国の王しなりしが。其国人ら馬の如く裸躰なるを憐れみて。王分身して蠶と化りて。衣を得せしむ。故に馬人ら感悲鳴せる故に。馬鳴と称ふと云ひ。或はもと高勝と称ふ。故に其説法の甚妙なる小馬も涕を垂れて法を聴しる故に。馬鳴と称ふと云へり。甚も信ぜられぬ説なり。名義の実説は。餘に有りなむが。傳説偏せるにや有む。此を菩薩とも。大士とも。論師とも。比丘とも。尊者とも。諸書に見ゆるなり。本は婆羅門なるが故に。華蔓寶冠の菩薩形なりし事は云ふも更なり。大士と称ふは其極なる澤法なるなと。既に前品に云へり。論師と云へるも。能く説論を立れば なり。斯て後に剃髪せる故に比丘と云ひ。付法を嗣しる由を以て。尊者とも云ふ。尚舊称を存して。後までも菩薩とは称せる事なり。其も此馬鳴のみ然るに非ず。後に出し龍猛無著世親などをも。右の如く称せるも。是故なりかし。赤保くは或人予を難じて云く。吾子菩薩を俗相と云ふこと何の据ら有る。既に盧舎那等特の身相を。宝冠瓔珞を以て荘厳せり。如来豈俗躰ならむや。又経論に菩薩は。在家出家の二種ありと説く。今吾子在家のみと謂ふるは。一偏に失せるに非ずや。答。お既菩

薩俗相のことを。我今近く事蹟を引きて喩へば。西域記に。
天竺の風俗を叙てゝ。国王大臣服玩良異華曼宝冠以為
首飾環釧瓔珞而作其佩其富商大賈唯釧而已と。如此なれ
ど。其利利婆羅門二種の人たゝ。ミな宝冠瓔珞を服せと見えた
り。此も去芳が目撃親規せる所を直に録せる者なれど。
其説を信ぜば。ぢて盧舎那は華厳の教主なり。此経高言
なるかと。既に辨ぜる如くなれば。仏身を俗相に設けしも。
俗諦に即して。眞諦なるの理を表示せむが為なり。故に入
法界品十三の善知識その比丘相なるは僅に六人に過
ぎず。餘を皆俗相なるを見て知るべしと云へるも実に然る説
なり。猶委くは本書〇通八会毘伽羅論及四皮陀云くとは。
に就て委くする所し
其毘伽羅論は。悉曇文字音韻言語の論なる事。まゝ四皮陀
は四韋陀典とも言ひて。婆羅門種の先祖梵天子より傳授
し梵字の本書なる事も。既に出しゝ如く今更に云はず。第二品に
委く説きより之却抑此毘伽羅四皮陀の学はしも梵学の根
り見て知るべし

本規範とする道なるを。此等の学に通達せる故に。迦旃延子
が。和げと人を遣して馬鳴を招請し。八結の廣説を造る成
業に産牙はなり。迦旃延子も亦より此頃の上首と聞るに
がはゝ別なる気ありし。其人のかく成業に産牙るを以て。此馬鳴
人なる事も推量らるあり〇為解八結義意若宝馬鳴随郎
著文云くとは。馬鳴が為に迦旃延子その造れる八結の義
意を解明しめて。義意のよく定まるに随ひて。馬鳴やがて
文章に記著せるが。十二年を経て。一部の毘婆沙を造り
竟る由なり。但し此説に依りて。此時迦旃延子を。
鳴に依托せるやとも思はる。其本書によれば故に。馬
をしも綴集し人の。その解釈書を造るに堪さる。道理
の有ぢくも。非ず。後人なを能く考へ審し。凡百万偈と云へば。彼迦膩色迦王

が時の三十万頌六百六十万言の毘婆沙に勝れる。大毘婆沙ぞ有りける。倶舎論頌の圓暉が疏に迦膩色迦王が時の輪懸渚千古と云へる是に潔ぎり然るを華厳の鳳潭が冠注り今の世親傳なる説を引きて濫せるを此比丘ども迦旃延子馬鳴を世友と共に四百年時の人とし其時の毘婆沙と馬鳴が迦旃延子とは相隔たること遥なりと心得しるなり是をそと何ちふ麁学ぞや接者と同じ論と心得しるなり是拠る書の文義も見えぬ比丘らなりとの時代も知らぎ其拠る書の文義も見えぬ比丘らなりかし古今比丘らの学ぶ所て此馬鳴を。渚書ふ云ふ如く。始めて大乗と称する説を弘めし人形るふ。是時かく薩婆多部の論説ふ労けるを思ふに。此を壮年なりし間の事ふて。此以ぎては。一切有部の古説を信愛せしが。中年より出て。其大乗説を立ありけむと所思る。此は事実の拠ぎ如を思ふるも。迦旃延子を

薩婆多部の人なれぞ。此時しも馬鳴が著せる大乗起信論などの如を見識よりて在りむふを必ぎ互ふ忌合ふ為き滑ぎるを十二年ぶかと相和して事竟しるは。同意の密合する所ありし故と思ふる然れぞ実りは壮年ぶて。迦旃延子が弟子なりし故ふ違はけむ。亦知る所ぞ。備ふる所思るり軌てぎを潭く考ふ事ば。思ひ合ふる事を起有りる。其を上ふも云ふる如く。此を付法蔵の十一祖と立る人なるぶ。其師を十祖冨那夜奢といふ。此夜奢が師を。かの迦膩色迦王ぶ。結集の時の上座ぶりし。九祖脇比丘なり。冨那夜奢が云と。付法蔵傳国人智識深遠多聞博記初脇比丘至り其国止て一樹下指て其地曰此ノ地若変金色当有聖人至矣言已地果成金既西夜奢果て至て遂納為弟子付法蔵但業と云り其地の金色と成れと云ふを方便化度衆生所作已辦使入滅と云ふ事を。斯ぞ此脇比丘ぶ事を。斯ぞ此脇比丘ぶ。元より薩

婆多部の正統第一の長老ゐて在りしかば。彼王が。渚部立範。
孰最善耶と問ふゐ。莫耆宗と答ふ。此を信ゐ釈門の
右義ゐし有れど。富那夜奢ゐ傳ふる所も。此旨なるゆと言
ふも更なり。然るゐ此者その師傳の付嘱ゐ背ひて。大衆部
より流れ出づる。渚法空無我の説をぞ弘ゑりける。但し仏法のみ
ならば何の学びゆまれ。青き蓋より出て蓋より青き考説
義釈の出来し事を。世ゆも常ゐる事なれど。其根本第一義
の立説を変廃して。黒白氷炭相反する。敵対の説を盗みて。
主説と為せは。轉変異学といふ者ゐゆそ有れ此説傳統付
嘱の人と云むや。然れだ上ゑ引しる此者の傳ゑ。服比丘が
樹下の地を指して。此地もし金色ゑ変ぜば。聖人至らむと
懸記せるゐ富那夜奢その所ゑ至れりと云へるは。妄誕なる
こと弥益く明なり。總じて仏書を妄誕幻説を担称固執し
ゆき物なれど。即ち一機見の活套ありて。其中より真の事実
を見出る事なるが。彼付法傳はしも。大衆の祖とする。馬鳴

龍猛らが立義の傳義を。かの大天が流と云ふ事をし覆
さむと欲して。服比丘ゆての九祖を。強ゑ引付しる物ゆし
て。大乗家流の援なれだ殊ゑ其用意して見ゑ有れ。至らら
ぬ物なり。此事は仲基も既く明ら云へまし如く所思あり。
偖ゆ。馬鳴が中年の頃ゆて。一切有部なまし事は。かの付
法蔵傳ゆ。実有我と計しる。天下の智士の。もし我ゐ勝者ゆ
らば首を截まて謝せむと誇れるゆ。夜奢が渚法空無我と
説く説聞て。浄論せるゆ。忽ち降伏せられ。其弟子と成まて。
其宗義を弘めしと有る如く那也ば。中年よりの轉学なる
ゆと著明なり。偖ゆ轉学せるゑ後の事を。渚書を引き
ゆ次品ゆ委く説く。然れど。馬鳴が性質元より接羣の高
大なるが上ゑ。能辯ゆ。比類なき者せしゆは。彼二十部の
渚立説を盡く網羅し。ゆ於梵志学の蘊奥をも襲ひ取まて

始めて其流派を大乗と称し弗前の二十部諸流を一切有部を以て小乗と貶しめ仏祖の秘蔵を總説せる
聖教に託して數多の大乗経等を偽造し其中に阿弥陀観世
音等を云ふを始め仏祖が夢に知ざりし彼国なる法身
の仏菩薩を無数に捏出し西方極楽世界の妄誕を
も構成したること次品に彼が自作せる大乗起信論等を挙て
繁説に注し辯ふるが如しや何〇或人問ふ前に西域記を採
に大乗流の魁首なりしや
れる本文に曰く。かの迦膩色迦王が時に結集せる。三十万頌六
百六十万言此論頌を。即今大毘婆沙論是也と有るを。玄奘
の謬と為て。其論頌を早く亡るが。今在る阿毘曇心論。雜
心論その畧説なり今存る玄奘譯の。二百巻なる大毘婆沙
論を。決めて當昔の論頌ならんと言ふれば。今かの迦旃延
子が馬鳴と共に製れる毘婆沙論。もし彼玄奘が譯せる。二

百巻の大毘婆沙論なるが。答りかの阿毘曇心は。七百年時に
出し法勝が作。雜心は千年間に出し法救が作にて。共に加
の三十万頌の畧論なるなと。既に説明せれを再更に云は
ず。もし不審くば上の第四條に注せる説どもを参却り見て知る侍し。今見在する大毘婆沙
論を。迦膩色迦王が時の論頌なら思事は。其全編を通観せ
ると。全く発智論の釋論にて。其発端に。誰造此論と自問せ
るを。誰造此発智論を造れると言ふ意れるが。其自答の説
の繁なる中に。仏在世以種々論道分別演説。仏涅槃後。或在
世時。清聖弟子。隨順纂集別為部類是故迦多衍尼子亦仏弟
世後隨順纂集造発智論於仏説諸道論中。安立章門摽挙略

頌造別納息。制總蘊名。謂集種々異相論道制為雜蘊集結論
論道制為蓄蘊集大種論道制為大種蘊集根論道制為見蘊集智論道制為智蘊集業
制為根蘊集定論道制為定蘊集見論道制為見蘊渚勝義智。
皆從此發。此為初基。故名發智論と言ひ。此文いしく畧して
論を披きる傍し。篇目も發智論に同ければ。彼論の廣説なるも論
ひ無れど。其発智は。五百年時に。迦旃延子が始めて造れる
論なれば。其を廣説せる大毘婆沙論の。四百年時なるべし迦
膩色迦王が時に。出来る由有るもや。是に敦て思ふに。西
域記を始め諸書に或は三
発智論を造れる迦旃延子を。三百年所の人と云て
百年初。或は三百年中に。発智論を造ると云へるを。然らずに
大毘婆沙論の発智論を釈せ由書なる事は知れども。其大
毘婆沙を迦膩色迦王が五百の蝙蝠僧らに命せて。作
しめしる物に為まおしく思ひて。世親傳に。迦旃延子を。五
百年時の人と有る事をしも深く省みず。強ひて彼を三百

年所の人と為して。四百年時に。彼五百の僧らが
廣説せる由に年時を合せしく妄事に有る歟。然らば此
の本文に。迦旃延子が自身に。馬鳴と共に造れる毘婆沙論。
を形はち今の大毘婆沙論形るらと云ふ。此二人して製
れる毘婆沙も。亦早く滅びて。今の大毘婆沙論も其に非
ら文。然れと中に。其遺説の存せるが有らむも。亦知る
ら文其をいと廣情に。旧説どもを集発し大廣説なれ
ばなり。一切経蔵の小乗論部中に。鞞婆沙論と云。巻首に。迦
旃延子造と題して。第奉の僧伽跋澄と云るが訳せる。十四
巻四十二篇の論有れど。発智論の次第に合はず。其くに躰
裁なる物なり。若くは。迦旃延子と馬鳴の製れる婆沙の。残
欠などを集めし物ぞ。いで其由は今在る毘婆沙の。初品を披
後人形如考ふ傍し
けば忽に。一切。鄔陀南頌。皆是仏説。仏於處々方邑。為種々有
情。隨宜宣説。仏去世後。大德法救展轉得聞。隨順集制。三品

名。謂集無常頌を為無常品。乃至集梵志頌を為梵志品と云へ
る文なり。鄔陀南梵語。此云自説也と言訳より見えたり。此の法救と有るを。被千年
間に出て。雑心論を造れる人あり。今の大毘婆沙論。もし迦
膩色迦王が時の論頌。或を迦旃延子が自撰なりと云ふ。九百
年を過ぐる後人の事を云ふ物うは。其を迦膩色迦王が結集は四百年時迦旃延
子が其、率は五百年時なれをなり。由と第百十四巻に。昔漢を多く並伝録せる所
なり。昔健駄羅国の迦膩色迦王云くと云る説あり。此王
が当時に録せる論なら むに。斯の如き語の有らむ物うは。
此等の事をも。何に比丘ら護法心に猶言はじ。仏法の後
も。例の懸記とは云ひ得ぬじくなり。
世に伝はる。年限を論ずる所に。如仏告阿難陀言。我善説法。

若不度女人出家者。應住千歳。度女人出家故。令減五百歳。問。
正法住猶満千年。何故如来作是説。答。此依解脱堅固。密意而
説。謂若不度女人出家。應経千歳。解脱堅固。而今後五百歳。唯
有戒聞等持。堅固。非解脱者。皆是度女人出家之過失耳とあ
り。此文を深く八十三巻に九業に見えたり。今は用なし。此文
紀文を略して引きたり。委くは本論に勘て見るべし。此文
に後五百歳と云るを。千年を二分に分けて。前五百歳後五
百歳と為る語形るに。洋に異元あり。猶満千年と云る
乃て。前五百歳を疾く過ぎて。後五百歳をも。四百年所を過
ぎるに。と著明なれを。今の大毘婆沙論を。仏滅より千年に
無くなる時に。出来し論なるに。更に論ひ無きに非ずや。然

婆こそ。九百年を過ぐる世ふ出し法救ぐ事を載せり
ゝれ。和漢の比丘ら此婆沙論の全書を見ることを、一人も無
てしが今論ふ如く説明せる書は、吾いまだ是を見ず。
東大寺の凝然のみ。此年来のうち合ざるる部ゝ心著ある
と見えて、其著はせる仏法縁起に、雑心法救、取婆沙法救と
云ふて此を婆沙より出しる法救と雑心論を作れる法救と
同名異人なるとの結構ゝて、彼日蓮とも云ふ比丘が宗
義に、法華経の釈迦と別なりとも云ふ邪義せ
る説なるが、其説立ちし曲あり、其を此法救まし出曜経、
法集要頌経、なと云を著せるに、出曜経の第一品を無常
品と云ひ、第三十二品を梵志品と別けて、上に引くる婆沙
の文ゝ大徳法救展轉得則えしとあるに品目符合し、但し
雑心論とも符合せるは、同人なるか論ひちく何とも言ら
ちも有りける。然るか玄奘此丘ぶ。其大毘婆沙論の巻首に
とに。五百大阿羅漢等造と署しその第二百巻の終に。三蔵
法師玄奘。澤斯論訖。説一須言。仏涅槃後四百年。迦賦色迦王

贍部洲集。五百應真士。如濕弥羅釈。三蔵。其中對法毘婆沙。其
獲本文今澤訖と云へるを。其澤者とも有ら思甚し妄言な
らぞや。大毘婆沙論の名を一切経蔵目録に。具ゝは説一切
有部阿毘達磨大毘婆沙論と云ふ。即玄奘が訳なり。
此を俗に新婆沙論と称ふ。それは玄奘より前に北涼と云ひ
し国にて浮陀跋摩と云ひし梵僧が道泰と云る僧と共に訳
せるが多く欠て八十二巻あれど。只三犍度のみにて全書
なら是が故訳の宜ゝら思ひて、玄奘が因ゝ更ゝ訳せる
故ゝ。かの北涼の訳をば舊婆沙と云へり。然らは今存る大毘婆
ふ。其に對ふて新婆沙と云へり。
沙論の作者なら。何者ならむと言ふゝ。先その論躰。決して彼
五百の蝙蝠僧など。多弊の撰ふ所ぞ。唯一手に出る文格
なるに乾て案ふに。西域紀に。中印度堰なる阿耶穆佉国の
所に。殑伽河岸に有り青石窟塔波。其側伽藍是昔仏陀駄婆論師。

唐言覚使。於是製説一切有部大毘婆沙論とあり。其製れる年時を何頃と記さ絲ども。今の大毘婆沙論の巻末ざとよ。説一切有部の論なる由を記せるか思し飲はば。此覚使論師と云ひし者の撰述なるかと疑ひ無し。是を以て上の出せる玄奘比丘が頌をしも。妄言なりとは言ふなり。但し西域記も。此比丘が撰なるに是説を載せるを。尽て彼の記の文を多く謂ゆる印度の記。すべて国志なと云ふ古記を取りて記せりと見なれば。覚元も是傳説を存し置て。承指の偽をぞ露はしける。此事の弘ちらば。彼が訳本述作の物か。かくる類ひも猶多ら れど。煩はしくて今は編し捨て。抑毘婆沙と云ふ語は。俱舎論の光記に。毘名号廣婆沙云説。謂彼論中。分別義廣故名廣説。名義集に。毘婆沙此云廣解。又云種々説。又云分々説。總有三義。廣説。勝説。異説也と有る如くなる故。廣博なる解書をば。皆かく號ずしと見えたり。然れど西域記か。如意論師が毘婆沙論と云ふ往々見えたり。

七

即於此第五百年中。四阿笈摩。叢集成焉。

是條ち四阿笈摩の経文と。説一切有部の諸論とを熟読し。なほ撰述し考究して。己が新に作る補注なる文なり。其はまた四阿笈摩と云るを。四阿含と同語なるが。此語の義を下なる如く注ふを。もて長阿含経序に。大教有三。約身口。則防之以禁律。明善悪。則導之以契経。演幽微。則辯之以法相。然則三蔵之作也。本殊

應。會之有点。則異途同歸矣。禁律、律藏也。法相、論藏也。契経、四阿含藏也と有る如く。四阿含は既ち契経を叢めし物なり。然るに其四阿含と三藏結集品とは、前の三藏結集品より後に出て思ひ明めたる故、其説くこと、説くこと、立却りて説くこと、説くこと、経はしも。今見る疑なく。迦膩色迦王の時の結集よりは後。まく今在る大毘婆沙論の。出来しよりは前に。肇めて集録せる物と所思多り。諸仏経を、纔てその迦葉阿難を始め大弟子らが結集の時は。既く紙葉に記載せる物と思ふ。古今の比丘らが説を論ふ事は。既く紙葉に記せる契経の有りしも有れ。多くは口誦授受せる物なること。既く結集品にもきこえるが如し。迦膩色迦王が結集より後なりとは。何を以てか形れ。此王が三藏を結集せるは。上に出せる二十部の諸宗義。既に起れる後なるに。四阿含を叢め

ある経くを視るに。異義區區にして。分別し難きに似たれど。巨細に視れば。二十部の点義。何くれと散見せるを以て。諸部の異論のみを起れる後に。其異部説の自他を論ぜず。集録せること。まだ著明に知られるめり。其を今逐一に論ずるに。下に次々論ふを見て知るべし。其を聞きて書見せる人を。新に為れなり。けて上に引くる雑阿含経に。仏滅より百十餘年後に出くる。阿育王の事を精しく記せる一品あるが上に。既に引くる阿育王因縁経とて。此王が六世孫なる。蜜多羅王とふが終亡せる事まで載せる一経あり。其六世の王ども。各く世を有てる間の長短を有れど。姑く一世を三十

年数〳〵と撰せるゝ。百八十年許の年数あり。此を上の百十余年と合せて二百九十余年なり。凡そ人の世代の年数を代より数ふるとの差別あるを代より数子て人数多うるゝ。其生子より生子とせをもて数ふれば、人数こゝ少き物なれて中せよりのせを数ふるも、大抵一せ三十年許り数ふ物なり。阿育王ゞ子孫を、其生子より生子へ傳へ貧しうせられを、一せを三十年といふ算を動くはじき算なれば、間のなわ長りけれ。然るに上古なりしは、せを有てる物も知る所なし。然るに彼経の末文に。彼王終亡。阿育苗裔。故是永終と云へる詞なり。此を蜜多羅王ゞ終亡せるより。数十年後をしらでは。記出はしき詞なれば。此年数を六七十年と加算て上の二百九十余年と合せれば。三百六十余年なり。かく三百六十余年後に記せる物の收多れば。阿含の経とゝ。迦膩色迦王ゞ三蔵結集の時よりも。後の集録なること。再更に論ひ無き物なり。此の天游ゞ市俵くゝ。雜阿含を見るゝ。阿育王ゞ法事を起せる事を載せり。是仏滅より百年後の事なり。然れば後人の手に成れる大と彰〳〵然として明なりとゝるは。然る説なれど。蜜多羅王が事を云ざるを精らかで。孫ゞ説むるは。後に護法の人なりて。阿含みを。仏説を阿難の記せる物なれど。阿育王の件などは。後人の差加なる物なりとゝ或を其丈を如来の懸記なるぞ。凡人の得知る所に非ずなどゝ云へる物をや。然て今ゝくゝ。五百年中と文せる由も。前〳〵條ゞ論ずる。六足発智等の諸論は。みな謂る小乗の論みて。五百年時前後に出来〳〵る物なるゞ。種〳〵の契経とも見ゆれど。阿含ちゝ名は一所もなを以て。今の如く四阿含と叢成せるを。其後なること所知多り。凡を諸論を契経に本なき起る事あるゝ。

し此等の論の出来し時より、四阿含より總じる経の有るむね、其事をえたる時、潤りなき事なり。然れと今傳はる大毘婆沙論よりは。前より叢録せる物ぞと云ふと。何を以て知ると言ふか。彼論か四阿笈摩と云ふ名は更なり。増一阿笈摩。雜阿笈摩と云ふ名も敎所より出て。下より出る文等の如きなるを以て是を知れり。大毘婆沙論より以前の仏書と潤り知られしなる物より、阿笈摩と云ふ名の出くるは、前品より挙しる点輪論の頃より外なあれこと無くすくなく中阿含の七宝品か雜阿含及所得と云ふことなれど、其もすくなく敎法と云ふ語の出て来る迄は非笈摩。

の名の出くるは。長阿笈摩。中阿笈摩と云ふ名の出ざるが不審くて。熟く案れど。契経、説と云ふか。増一雜の説も有れど。長中二阿含より收しる法経の説多く。南く直に経名を出せるかも名なき歟れ。長中二阿含か出ある経説多しり。然れど古く契経と云ふは。彼二阿含より收しる経等を專と云ひしを増一阿含。雜阿含なる説等を叢めて後は。四阿含の名多號て。四経とも小契経とそ称するも。今試みり大毘婆沙論より出くる、長中二阿含なる経等を一二挙げて梵網経、六十二見経なと云ふも、長阿含なる梵動経なり、勝威経と云ふも周尼沙経なり、増一経と云ふは増一経なり、大涅槃経と云ふも遊行経の後分なり、帝釈経なり、大因縁経と云ふは、釈提桓因問経なり、猶中阿含の経も数多なり、其も塩喩経、天使経、師子吼経は更なり、大因縁経と云ふは大因経なり、梵問経と有るも梵天請仏経なり、梵網経なり、帝釈経と云ふは釈提経なり、なを増一雜なる経等も往くに見えたり。彼此は共に四阿含に所見なき経なれど、然のこは煩しく抑阿含と云ふを書名と為くるは。元より仏説の事に非ず。婆羅門の渉し伝ふる、梵天の聖法を称せる

語ひて。謂ゆる四韋陀の事形り。其は金七十論の偈よ。阿含、是聖言と有る迦毘羅仙が釈ひ。聖教名聖言。聖言者。梵天所説四違陀論也とあり。此文以ゐ切りて引くり大毘婆沙論の。四阿笈摩とある玄奘が音釈に。阿笈摩、梵語也。亦云阿含婆。西域書名。四韋陀典之一也と見之。阿婆とは、第四韋陀の梵名なりと。第二品了注せる如くなる字。阿笈摩の異名と為べるハ謬なり。西域書名ゑくは、決めて西域書。四韋陀典、之一名也。ありし文の後に錯乱せるなり。其は四摩大乗論音義よ。阿阿笈摩とハ、四韋陀の別名なれどなり。阿笈摩梵語。亦云阿伽摩。旧言阿含。訛畧也。此云教法。或言傳。謂展轉傳来。以法相教授也と言ふ。因名集ゑる。阿含、正云阿笈多。此云教と有れど、多は摩の誤字。是等を合せて考ふるに。阿含と云ハ。もとは非ざるが。

梵天の言教ゑ。展轉口誦し傳ふる。四韋陀論を称ふ古語なるを。仏法に採りて其契経丹名質あること著明なり。四韋陀論は、元ゑり口誦ゑ相傳し来れる物なるを思ひ合に侍し。其は仏説ゑ言教と。既ゑ第二品ゑ云ふる如く。元ゑり口誦ゑ傳ふ来れる故形ゑ。然れば四阿含と云ふ事。

るゑ。彼四韋陀の例に働ける事。ゑ。更に疑ひ無き事形り。其は此名のみならず。仏法ゑ用ふる諸名目ども。梵志学に昔ゑ固ゑりありしを。其儀に繋ぎるが多きこと。既に往く論ゑれど。今更に要しくハ云ハ。ゑ。ちて此四阿含ゑ。一手ゑ成せる物に非ず。其撰者は各く別形ゑ。其は中形る諸経どもなり。諸部の分流てるゑり以来。次く次く記し傳ゑる物なれ。其を四阿含丹叢書せる徒。各くふゑその躰裁を整ゑ。且その好む所に

随ひて。擇び叢めし物なり。然て大部なる諸経どもに、本末は般若。法華。華厳などの類。貫ねて一部の全書なる有り。其なるを一部に叢書せる有り。四阿含は。大宝積経の類。なり。此事常に心得て在る侍し。其は何を以て知ると言ふに。四阿含互に北文格一致なる。文。同事の説法及び事実子。彼此も此よも載しるに。相違多文を以て。然る所以を明し得ざり。其文格の異を少し言むに。長阿含の経品ごとに。其始めを如是我聞一時仏在某国某所与大比丘衆千二百五十人俱。爾時云々と記し。爾時とは。より下は事の類に依りて。サハ異なり。其終りは。爾時彼比丘諸比丘聞仏所説歓喜奉行と必ず云ふ。唯あの文格は外れ。るは。大會経と云ふ品のみあり。其由は下に論ふを見る侍し。雑阿含は。毎段の始終は。大抵。長阿含に同じれど。比丘の負数は。記さず。絶て此文法説相とは。決て同手の様ならず。是まで活然は。一手に出るかの。疑途に渡るまじ文凡自眼の人見て着くかの事実の相違ども明に見出めり。中阿含の品々は。始終子。我聞如是一時仏。遊某国某所与大比丘衆俱。爾時云くと書して。比丘の負数を云はず。与大比丘衆俱と云ふ條々も多く。由て。初発ならず文中に比丘の数を云ふと有るも。必ず千比丘と云ふ例なり。終は仏説如是事比丘及諸比丘聞仏説歓喜奉行と。その説法の結句より。二字放ちて記す例なり。再出せるを以て。彼経と一手に出ずるは論ひなく。雑阿含の文格と異なる事も。増一阿含の品々は。其発端を。

聞如是一時仏。在其国某所。爾時云云と言ひ。比丘の員数を云ふときは。与大比丘衆五百人俱と云ひ。まゝ〳〵記したる千二百五十人と云へる所もあり。其終文をば一品ごとに。皆諸比丘等當作是学。爾時諸比丘。聞仏所説。歓喜奉行と云ふ。

と。諸比丘等當作是学と云ふと。増一に限れり。此餘に婆羅門の事を称せる経諸。おゝ新に仏法に入りしる者の。果を称せる経諸を始め。其外にも経諸はもゝあるを。四経各〻丹文格同じからず。斬て同じ事実を彼丹も此に出せるに。互に相違ある事は。大千世界品。仏祖生涯品形どに。次〻に技へ行せるごとし。四阿含の経ども若一人の手に成し。ならむには。然る相違の有べくも非ず。此を其中に收しる経品の本書はそ。諸部まで次〻に録せるが。散かひ傳はれる物れ。為る大部に聚集し徒らな己が向〻に経を成して記しつ。其間には。自見自説をも差加へし故に。右の如く八成せるなり。此説を不審しと思はむ人も己が考へ四阿含の中の同じ事実を逐一に汲び見て辨ふ侍しかる事ども八。各〻その澤者の別なる故なり。とふ護法家も有めれ。然れども非ず。其梵本の各〻別々に成れる故に。元より異有るなり。然るは比丘の員数のくちらに天地の廣狭を始めもその仏説を其侍に傳ふむ丹は。決して相違有るべき事をも。其傳者の別なるなと知らる。其は澤者も違を切ても。元より其傳者の別なるなと知らる。其は澤者も然る数量をば異にし。其に乾てもし。阿含をはじめ経〻なる。阿難が誦唱を直に筆記せる物とへる説どもの頑愚を極めし説なる事は知侍きなり。其は中阿含の侍者経に。阿難が但

槃せし事まて字載せる等を何とか言はむ。斯て其経の終り
ふしに。仏説如是。彼諸比丘聞仏所説歓喜奉行と有るハ。
ひに堪ぬ事ぞかし。まゝ此国に思ふバ円経の薄拘羅尊者
有経ハ、薄拘羅比丘が仏滅後八十年ぶ
わど学道して涅槃せる事を記し畢へて諸比丘聞仏説已歓喜
奉行とも云ひ斯ても護法者流は諸経をも仏説仏祖が真
説を阿難が直に記載せるとも云むと兼好法師が徒然草に
或者ハ野道風の書る和漢朗詠集とて持ち来れるを或人
申相傳ふるとハ侍らじ。四條大納言の撰は
れとる物ぞ。道風がかゝむ事は、時代や違ひ侍らむ。寛平法
ものとゝけれども。然候らへば。あそせに有がこき物なれ侍
りけれとも。猶くく秘蔵しける。と記せるあとそ思ひ合はる。
はて大毘婆沙論ハ曾聞。有一苾芻。先涌得四阿笈摩。中間妄
失復温涌之。盡其方便。不能通利。往阿難所。問其因縁。阿難答
言。汝今可往以油塗身。温室洗浴。求諸随順衣服飲食卧具。房
舎説法人等。苾芻依教悉還通利。尚〻舎利弗。犍大蔵二苾芻。
俱涌四阿笈摩。一皆通利。などゝ云る事ハ。此類那含文はも
しも多くは引出ばるむ。此文ハ四阿笈摩と號けし経とも。舎利子阿難
が在世頃より。既より伝りと為しるは非なれと。但く其経説
ゝを。口誦よりて傳来せるあと。是とても知らず。然てかく
間涌せるが故ハ。その記憶の方術ハ有ける。印度ハ、記憶の方術
ありとゝふ事ハ、南海寄傳ニ見えて。然ハ同じ論中
既に第二品ハ論第四紀勒乾て見る侍し
ハ。三蔵の事を云ふに。必その文例として。若持毘奈耶。若涌
素怛纜。若学阿毘達磨。とやうに録せり。毘奈耶を戒律なる
故に持といひ。阿毘曇は論蔵なる故ハ学と云ひ。素怛纜を

契経なて。口授なる故に。誦とは云ふ。一部二百卷の新婆沙中、こゝ此文例あり

心を著て案る傳記あり。猶言はゞ同書に。曾聞。商諾迦衣大阿羅漢。尊者阿難同住。第子。般涅槃時。尚有。用所経論隠没。況彼後近。今諸論師。滅経論隨没。豈可知。故経論説。有餘師説と有るを思ふ。此を畧文あり。妻くハ既ふ三蔵結集品に引くり商諾迦衣とふ。阿難が第一の第子なて。上座部正統の。第三祖を受く。此を文の隨ふ見て商諾迦衣が座部比丘なる事既に出くり。

当昔。古でに紙葉に載せる経論の。然しも多在しと思はむ。謂ゆる辺鄙衆の見あり。其は此比丘に始る。其より後なり。是大毘婆沙論を造る当昔まで。諸論師どもの滅る時時。経論等の隠没せるとなるに心を著けよ。昔口誦の授受れる故に。未傳の経論を。その師比丘らが命と共に隠没して。口授せる経論のみ遺れる由なり。是故に次くの論師ら。各〻其口授なる経論に。自見自説を混淆せる故に。契経説有餘師説とはなへるなり。そし実に諸在る経論とその師比丘らが死ぬ時ごとに。紙葉に載せる籍の有ることゝ。龍象辺鄙の護法者流も。其念を志ばし忘れて。平心に思ふ傳ふ。偖ち口誦に傳ふる古風なるに故に。紙葉に載せる事始まれる後も。其口誦を専として。写本は甚く希なりし趣なるなり。下にこゝ天竺記傳の文なて著し。是を以て諸部各〻その傳誦なる契経を更ゆ。律蔵論蔵なも。偽文新説を挽入して仏説と托し。我聞如是と云ひ募れハ。如是我聞と

心し淨し記各〻部執の宗義を書記せる故に。遂ゆ四阿含の異説紛〻として成りれる。諸経の発端に必ず我聞如是とも。如是我聞とも云る事は。既に三蔵結集品に注せる如く。神仲基ら言に。我者何。後世説者傳聞也。如是者何。後世説者傳聞者自我也。聞者何。後世説者傳聞也。如是也と云るが如し。阿含より後小次〻に著る諸経の初免ゆる。必ず云へるハ。皆阿含の例に効ふるなり。諸経の初めに。必ずかく有るを以て。和漢の旧比丘らが注せる書等にも云へる説ども。総て取るゆ足ぬ事。既に彼結集品に辨ずるとれだ今更ゆ云ハ足ず宗輪論の初めに。如是傳聞とも。今引く大毘婆沙論の文に。曾聞とふ説の多かるも。皆古説を傳誦せる由ゆて。如是我聞と知る時し。然れば毘婆沙よりも。仏滅後。ふに意野ちら足ずと知る時し。

有於素怛纜中置偽素怛纜毘奈耶中置偽毘奈耶阿毘達磨中置偽阿毘達磨諸偽文句。不應通釋。と云へる語もあり。信に此語の如く。経論ども偽説多かり。然れど阿含部中ゆは。古来の遺説も有るれば。假令その説法浅劣なるも。仏説の古義ハ存せり。〻仏祖が履歴に妄誕の有るも。其妄中ゆ真説のあるもの。大乗諸経はしも。彼英秀才の論師ら。異部各〻の偽作なれど。假令その説法高妙ゆるも。仏説の古義ゆ非ず。〻仏祖が履歴の霊異も。其真説も千百中に一つと知ぬし。是を以て諸偽文句。不應通釋とは云ず。然るは此大毘婆沙論はしも。仏滅後千年に垂しる時の撰ゆて。大乗偽経どもの大きなるハ。大抵世に弘まれる頃なれば。よく其差別を知て。記せる説なること。其書中に阿含中なる諸経の説。または契経と称し。載ハ増一阿笈摩。雑阿笈摩ゆと称して。其部中に。取用せぬる経説ども。を。舎経多かるを見るに。其余経の説とも。餘経説云〻と並べ云へる文のいと合ひ契経説とも云へるが。多く阿含の説に叶ふるを思ふべし

然るに。其偽文句の経〻字通釈して。皆仏祖が真説と為さるは。謂ゆる天台の智者が。五時八教の説なり。其牽強附説の甚しき事思ひ遣るべし。其由は次品に委く解て。けて四阿含の諸経が後来せる始末。まづ第秦の法顕が遊天竺記傳〻佛子国の処に。法顕在此国聞天竺道人於高座上誦経。法顕聞時欲写此経。其人云。此無経本。我止口誦耳。法顕任此国二年。更求得弥沙塞律蔵本。得長阿含。雑阿含。復得一部雑蔵此巻漢土所無者。得此梵本。とあり。是より前にそ已連弗邑に到る所〻法顕本求戒律。而北天竺諸国皆佛〻口傳無本。可写是以遠歩乃至中天竺。於此得一部律。是摩訶僧祇律。伝在世時最初大衆所行也。於祇洹精舎傳其本自餘十八部各有師資。大帰不異。於小〻不同。或用閑塞。但此最是廣説。備悉者。復得一部抄律。可七千偈。是薩婆多衆律。即此秦地衆僧所行者也。市〻皆佛〻口相傳授。不書之於文字。復於此衆中得雑阿毘曇心。云〻とあり。て律を求得るる事なりし故に更求とは云へるなり。法顕が遊天竺記傳とも。既に天竺記とも見えたり。即法顕が彼国に虚遊せる事を自記せる道の記なり。斯て法顕その国に還れるは。東晋の安帝が。義熙元年と云ふ年なるが此

二経を譯せる事は。唐内典録に。長阿含経二十二巻。東晋安帝世。罽賓三蔵仏陀耶舎。秦言覚明。弘始十五年出。仏念筆授。

貞元録にも姚秦の録より出して。仏陀耶舎弘始十四年出至十五年訖。涼州沙門竺仏念傳譯。秦国沙門道念筆受。僧肇製序。とあり。耶舎為人髪赤。善解毘婆沙。時人号曰赤髭毘婆沙。為羅什之師。耶舎先誦曇無德律。司隷校尉姚爽請令出之。其奥疑其遺謬。乃試耶舎。令誦羌籍。苻方各四千余紙。一日乃尽。執文覆之不誤一字。衆服其強記。即于弘始十年戊申歳。四分律鞞婆沙。阿含等経。十五年癸丑歳。法顕所将梵本。然後翻出衆説少殊。とも見えたり。二十二巻

よて中に三十経あり　雑阿含経五十巻。南宋文帝世。中天竺三蔵。求那跋陀羅宋言功徳覚。在官寺譯とす。貞元録に刘宋の録に出して求那跋陀羅印度人也。於在宣寺訳梵本。法顕賫来とゝ云ひて。二人が傳はりたる中阿含増一阿含の始元て傳はれる事は。内典録に東晋孝武帝世。鳩佐勒国三蔵曇摩難提秦言法喜。以建元初至長安。東晋とは謂ふ司馬晋初て。此を正統の国号と為す。秦とは甚世の支国なるが。別に国号を立て帝と称せり。此を符秦とも云ふ。建元とゝ云ふは其秦の第四世。符堅と云ひし人の年号にて。其初年は東晋の哀帝と云ひし。興寧三年なり。諸説は王統の慧らざる国なるに。かく胡乱しき事ども。の国なるゆ然れは此の文は東晋孝武帝世。以秦建元初。鳩佐勒国三蔵曇摩難提。長安と。涌泉阿含。梵本。口授。仏念。写為梵文。到二十年。云へる意なり。

為符主澤中舎作五十九巻。是第一澤。仏念筆受増一五十巻。

為秦武威大守趙業出是第一澤。瑟嵩仏念筆受時。僧慕容沖及姚萇反乱。関中危阻。未遑妻妾。難提西出不知所之。とあり。増一阿含経序に。晋沙門道安。記せる類は少く異なり。そは外国巌岫之士。江海之人。於四阿含。多詠味茲。曇摩難提者。鳩佐勒国人也。涌二阿含。周行諸国。無土不涉。以秦建元二十年来。指長安。武威大守趙文業。求令出雪。仏念共傳曇嵩筆受。歳在甲申。夏出。至来年春。乃訖為四十一巻。令為下部。上部二十六巻。全無遺忘。下部八十五巻。失其録偈也。余外法和共考正之。全是二阿含一百巻。とゝ云ひ。貞元録に然れども此二阿含の。漢文記を所とす。合せ考ふ。

士牙傳来せる梵本ならで。彼国の習風のまゝ。紙葉の録にして。口誦して記えゝるを。口づから仏念と云ふ人接けてまづ梵文に写し取る。然して後に翻澤せるわけで有る。漢語に澤せるにら。甚しき大部の九十九巻ほれど。梵文は

て在しかとは。猶幾ばかり多有りも。然るを盈く闍誦して。
委曲に傳授し在しは。最も[illegible]しき記憶[illegible]れ。然
るわさはを。己がゞと記憶あ[illegible]者の心には。甚く信難き
事に所思れど。上ゆゑ云ふ如く。彼国にも。記憶を学ぶ法術
ちゆに有れハ。曇摩難陀も其法を知りしりも。増一阿含の序にハ
増一と中と二阿含を闍誦せる旨を録せ。四阿
含を誦じ[illegible]とあり。上に論ずる如く。四阿含[illegible]に枝例の
別なるまゝ相似る説くの。ゆゑ[illegible]なる差別ありて。嚴重に
傳誦し別ちしるを見るに。彼仏生が尚書の殘篇を闍誦
せりとゝ云ふ事法どハ事に[illegible]まゝ是に軌て第ふに。法顯らの
を聞でとゝ[illegible]感らるれ。
国に渡りて。経律を求むるに。多く闍誦ゆて。写本ハ無く。僅
に上に出せる汁りの本を得るに。適に長雜二阿含の梵

本を得しる事をし。漢土に未傳はらぬ物とゝ。甚く悦べる
躰なるが。今の澤本は即その利形なると。雜提が。中増一の二
阿含を。闍誦ゆゑ傳ゆし事とを思ふ。四阿含の名ゆて婆
沙に見えて旧けれ。彼国ゆも元より長雜のゝを紙葉ゆ書
して。中増一の二阿含ハ然らず。唯に口誦ゆゑ傳来しけ
むを。亦知傳らゝ文。但し此ハ慥に所見しる事ハ無れと上下に
りもと想ふ由を浅くゝ云ふ事どもゆ拠て必かくゝあり
耳なり後人なを能考ふ傳し。けて右四経の差別ハ。四教儀集
解の標注に。報恩経に云破渚外道是長阿含。説種々洋法是雜
阿含。是坐禪人所習為利根弟子。説渚深義名中阿含。是学問
者所習為渚天世人。随時説法集為増一。是勸化人所習也。よ

と長含多破外道。中含多説苦空無常雑含多説禪思及観門等。増一無偏多説。通被利鈍。定散邪正故。後と云へり。其差別の大旨を知傳し。然れども子はうせて此説の如しとも事なり。其は上下に論ふ。長中雑増一形ど題する義は。但ふをもても知る傳し。思はむ所なり。許多の開合ある舎論の道構紀る。長阿含多説長偈。中阿含多説中偈。三増一阿含。一法為始。於一上増一至多故也。四雑阿含。謂種々説也と云ふ。然も有るくけうそ。おし四教儀の標注に。五多長含。集不長不短。経為中含。後増一増一至諸法故為増一含。集比丘比丘尼。諸天帝釈等。雑事為雑含也とも云へり。是も通ずる説なれど。偏しつゝて四阿含ハ。総叢として。右の如く名題するは。大抵五百年中より。七八百年時までの間ならむと所

察ふ。中に。其叢成の前後をえむゆは。長阿含ハ。雑中二阿含の叢集なり。此二阿含の後に。増一阿含を裏先とすると思ふ由なり。其はる形。長阿含ハ。上座一切有部の古傳来を集し物と見えて。経々品々大抵は梵志学を始め。他道を破体する子主と為し。仏祖ぶ生涯の履歴に。ふれきて。其立義を説演するは。実に諸経の最先とするに論なし。そは仏祖ぶ説く道義を傳ふる事ハ。婆羅門ら古来の所説を破体せる子要と為すよし。云へるなと。既ぶ第二品ハ注せるを見るしたて此経凡ては三十経四十四品。何れも実は長偈なて。その説相の一致なる中に。大會経と云ふ経のみハ。疑なく後加はれる物なり。其ハその発端に。如是我聞。一時仏在釈

翅搜国迦維林中与大比丘衆五百人俱尽是羅漢復有十方諸神妙天皆来集會礼敬如来及比丘僧時四浄居天云々と記せるは。餘の二十九経の文例とハ異れり。はた比丘の負るは更なりといはば。凡ての文法も違ふ事。眼を精く考て。餘品どもと合せ考ふ時如くて其終りを。仏説此法時八万四千諸天遠塵離垢得法眼浄諸天龍鬼神阿修羅迦樓羅。真陀羅摩睺羅伽。人与非人。聞仏所説歓喜奉行と云り。餘品ハ阿須倫とある事。阿修羅と云ひ緊那羅とあるを真陀羅と云ふ類に違ふ事も多し。其余の文例もあるを抑斯の如き方廣なる大會ハ。後に大乗と称せる偽経どもの趣にて。長阿含ハ絶て例なく。かゝる兜文ハ。仏祖が取ざる所なる事以て。此一経ハ後の加入なる事を證ぜ

ばき分る。十方諸神妙天潮なる天龍八部人非人の集會せるハ仏一音説一切法といふ説を起せる以来の偽説なるに。説一切有部の宗義ハ。非仏一音能説一切法と有ハるて著明しぬるハ然しも諸天人鬼方物の部族の集會せむに。豈同一音諸法を聴入れ為む事を得むや。其を以て古説ハ。然る大會の説無量に法を聴入れ為む事を得むや。其を以て古説ハ。然る大會の説無量にして故に長阿含ハ其説なく。かゝる一切有部の宗義に。古の如しハ去牙り。然るに大衆部ハ。大天が異見を起せる以来。右の如く云ふ言せる故に。後の大乗偽説家ども其云ふ言に本ゐきて。華厳法華を始め其會ごとに。諸天人鬼八部人非人等あるを。同一諸言の説法を聴て皆能く聞受しる類ひ作れば是言を以てなる。阿含と大乗経ごとの真不真を解ふ傳ふ。阿含と云ふ中なる長阿含の仏祖が古説を傳ふ事を知ふ傳きまり。猶ふの事及び仏祖の兜文を取ればなる。次品ハ委しく説くを俟ず。次に雑阿含ハ。実ハ禅観の説法を多く集記せるか。其禅観はもと梵志の専門な

る子。仏祖の説とおく竊して。己が宗義を取まなせるを。後
て梵志学ハ絶て。その禅思観門の法。こを仏法に收とれ
ど。是まで仏祖が古説と云人も雑なし。抑禅観の法門ハ。も
て。真苗裔しる摩羅川の尊宗なるが。此も渚熱の古宗に傳
ける。胎息行気法一の道なる日じき事にて。第二品に説明
せれバ。今更ハ斯て第二巻に。廣く苦空無常の事を説とる。
多くハ古ハ。
岡の牧くるを始め。空教の旨を説しる品くも。多く收とり。然
て大毘婆沙論ハ。雑阿笈摩中。四句法。是如彼頌言。賢聖法中
善言最。二常愛言遠不愛。三常実言離虚誑。四常法言遠非法。
とあり。此文小異れきに非称ど。大凡そ今本の旨に叶ふれ
ど。今本やがて當昔の本ゆや有らむ。上ハ云ふ如き。一切経藏中に。五蘊

皆空経と云ふその有るハ。即雑
阿含の第二巻の別澤同本なり次ハ中阿含は。苦空無常の説
をも多く載しれど。絶ては長雑二阿含に並ぶ云ハむも雑な
く。長阿含の廣略を。補ふ為き経品ども。少からず。雑中と
も毋。能く長阿含と校べ見て。古義を擇ぶ歟し。是を以て仏
品に。往くもの畧を措きて。餘の三阿含なる情況を取れる
事ども。あり。但し古義とは云ふ。仏法の古義の義なるを
ハれ。真の古義をなふるは。次小増一阿含は。疑なく上の三
ばらば。思ひ混ふべらんば。
阿含より。後ハ集記せる籍れ。其は此中れる経品ども。を
案るに。上の三部なる説くを翻案して。方廣微妙なる類を
作り変しる説多く。方廣説の嗚矢と云ふき説相なるもと。
東方寄先仏と云ふ。国土の事を妄説しかの弥勒と云ひ

し比丘が事をいと仰山に莊厳せる趣などを以ても知る
べし。抑此の弥勒と云ふ者の由来い中阿含の説本経より當
来人寿八万歳の時に至りて、螺王と云ふ聖王ありて、其
世に我が如き仏の出世有らむと云ふ説法しる時に、其
座に弥勒阿逸多と云ふ比丘在りて、我その仏に生れ出む
と揚言し給ふを伝祖が誓て授記せる事あり。此は例の一説法なるを、増一阿含にその弥勒比
時の勧化、口に任せし説法なるを、増一阿含にその因縁を作りて加様彼
丘を菩薩と称し初めて、其に過去世の物語を待つ由を敷延せる
物利天に生じて、八万歳の世に出むと待つ由を敷延せる
より、後漢の大乗家なる弥益に妄誕の経説を作りかへ
しる事既に第十五品に説しる如く、おし次品ふ説ふる
が如し。其弥勒比丘は、名数集に、羅什云、弥勒姓也、阿逸多
字也、南天竺婆羅門子也と見えて、謂ゆる十大弟子なる入
阿私陀、孔比丘れるを、此一時の楊言より、菩薩出世の
曉を待つと云ふ妄誕の出来せる事、既に其、兜率天上
に生しくる由して、太しき大乗経説を作り出しくり、
是を以ても、増一阿含の、大乗嗚矢と云ふべき事をしり
きれ。

扨て、大毘婆沙論に、有説、増一阿笈摩中、四法経、是一、無
貪法経、二、無瞋法経、三、正念法経、四、正定法経と有る説を、今
在る増一の四法の所に比擬るに、相発せべき法経無ければ、
思ふ由なりて、長阿含に收しる、増一経と比校せるに、其法経
よく符号り。然るに其、増一経の、第四法に、四種法と云へるが
云へるが正念法経、四覚法と云へるが無瞋法経、四滅法と
当れり。然るに今の増一阿含に此事ミえず、其毘婆
沙論に、曾聞、増一阿笈摩経に、一法乃至百法、今唯有一乃至
十、在、餘皆隠没、又於増一至十、亦多隠没在者、極少ともあり。此文
は今の増一阿含を初結集の時、昔より、有来し物に取成し
る説なり、然れども其、増一は更なり、余の三阿含も、当昔よ
りの物に非ざる故に、上に論ずる詩論ども、四阿笈摩の
名は有れども無く、今の大毘婆沙論と、増一阿含よりも後の
造れる故に、斯の如き強説を成せり、或ふこと勿れ。今此婆沙の説等に依りて考ふる

より是論の出来しはまで。増一阿含とえしは。もと長阿含中
なる増一経。三聚経。衆集経。十上経など。都て一を増して十
に至る法なる経等を主と為し。今の増一阿含なる品くを
合せて。一部と為したる名なりしを。右の四経を。早く長阿含
に入れたる故に。後人その四経を省きて。其遺編に本の名を
存して。殊に方廣風なる説等を。多く收め入れるが今在る増
一阿含ならん。と所思るれり。抑長阿含中れに増一経は。其
文に。一乗成法。一修法。一覚法。一
一滅法。一澄法と。凡て四法なり。二多成法。二修法。二覚法。二
滅法。二澄法と。凡て八法あり。次に新の如く法を増重して。
第十多成法。乃至十滅法。十修法。十覚法。十滅法。十澄法と。凡て
四十法なり。然ては此五の二百五十戒を具ふる法なりて。録
の三経も此の五法なるは。増一その名もく叶ふれど。今在る
増一阿含経は。一日数字ある條をは皆一に新録し。二数字なる
條をば皆二に新録し。新の如く次く。十数字ある條まりで。

リ新録せる分の事に。ふて味ひなく。一を増して十に至ると
えふ法例にも。不相当なる文例なり。是を以て今引く摩訶
の文に思ひ合せて。右の如く考へ
しるなり。後人なほ然く考ふ法しにて是考究の當否は姑
く措くとも。此経は方廣説の嚆矢れる事は。近く其序品に。
此経全部をも。阿難が説出せる由に安諸して。梵天下降。及ヒ
帝釈濩世。四王。及ヒ諸天。弥勒。幻術。尋来集。菩薩欲偈。不可汁。弥
勒梵釈。及ヒ四王。皆恵双手而哀清と云るが。大乗の説口なる
事ならば。契経一蔵。律二蔵。阿毘曇蔵為三蔵。方等大乗為
遂。及ヒ諸契経為雑蔵と云へる頃も有るを以て。大乗長説の多
うる事を辨ふ法し。然して此頃の次に。時に阿難告優多羅曰。
漏減。増一。八。出三十七道。之教。及ヒ諸法。皆由此生。云々。あるは。
例の妄誕なるはと云ふも更なり。其八辺部畏ふそ知ぬ。

め、多聞衆ハ已ゝ辨を待ちて然て序品にのゝ斯の如く
毎く能ゝ知るも物ぞ。序品の諸契経を雑蔵と貶せれど。本文
方等大乗を称して。爾前の諸契経を小乗と称せ
る事は。唯方廣流の率れる事にして。其流を大乗と称せ
る事は一所もなく。亦謂ゆる契経流を小乗と貶せる條も
有ると無し。其は此経を叢めし頃まで。尚いまだ然る差別
の名目無きし故なり。然れど此序品はその差別の出来し
より後世人の。加へる序なること疑ひなし。但しかく言ふ
は謂ゆる小乗は謂ゆる大乗の名目は無きしと云
四阿含の出来しはまで。謂ゆる大乗の名目はうちまで。漸ふ徒も有む
ふを聞て。後の漢法家れど。此序を引きて。
と。今まづかくは。
疑況なる物なり。然らば其本文に。何等の大乗経流ゝ有る
と云むに。等見品に。舎利弗が曰。戒成乾比丘。當思惟五盛陰無

常為苦為悩為多痛畏亦當思惟苦空無我便成須陀洹道邪
畏品に。僧伽摩曰色痛想行識皆悉無常。此無常我即是苦。苦
者無我無我者即是空也。此五陰是無常我。無常我者即是苦。
我非彼有彼非我有。苦し還相生度苦亦如是如来告諸比丘。
我声聞中降伏魔者僧伽摩是也。六重品に。仏言我之所説色
者無常無常者即是苦。苦者即是無我無我者即是空也。空者
彼非我有我非彼有。如是者智人之所学也。我之教誡其義如
是と有るを始め。此旨を演しる説法なわ汁ふ事よ暇有ら
ず。雑中の二阿含ふ。かゝる意なる語ゝ数多あれと。斯ぞう
ち。絶て一句も有ることなし。況て長阿含よ
説善不善具足説法而無所得。説空法法而無所得。此法微妙

猶曖昧と云へる法あり。空流と似たれど。此は増一の六重品を見れば。我今当流第一最空法と云ひて。十二因縁の事なりと。是の事は既に第十九品にも云へり。然れば実ふも長阿含は。上座一切有部の真面目なりと有りけれ
ども。斯の如く流伝等は。都てかの大天が浮論なりし後に。大衆部より次々生出でたる。異部の謂なり。如是我聞を改め入るなれて。阿含部の経なりと出でたれ。仏祖が古流より脱ちたるなり。言ふも更なれど。此経は殊に是空流を信じたる者の。集録なるなと疑ひ難し。故是を以て思ふに。上に粗言ずるが馬鳴が師なる富那夜奢が流伝に。苦空無我悉皆空寂の旨を立てしなれば。元より此流を用ひしなり。然れど此経。やがて富那夜奢が集録なるかの般若心経と云ふ物。はたはた今引

くる文の皆なれるは。即かの夜奢が偽作なるも亦知られら爻。まづ是を軌て思ひ出づるに。彼大毘婆沙論は。流一切有部の根本とは云ふとも。既に渚大乗経の偽作悉く出て後の撰なるなれば。其流ども多く交れる中に般若流たる殊に多し。其は第百七十八巻定蘊篇の菩薩経と云ふ大乗経を引きて。四波羅蜜多の事を広流して。若時菩薩名曜頻陀精進菩薩聴慧第一論雖無敵世共称仰。有此名為般若波羅蜜多圓満。なども云へり。四波羅蜜多とは。施戒精進般若。の四なり。此を思と静慮とを加へて六波羅蜜多と為にすれども別流なれば。前の四に聞と思とを加へて六と為にすれども。初学の人。一切有部の経論なりと思ひて。龍象辺獣の牛ら驢を実るべきなれば。然るはかの般若波羅蜜多心経と。観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。叙されは文殊をも。法師が秘鍵。能行人とも。渚乗之行人とも。自在智の法を得もと観ずる菩薩と云へるなれて。一菩薩の名なれば。観法の人を広く指せり。般若を智慧と翻し。波

羅蜜多を到彼岸と訳す。彼岸に到るとは、此岸より中間の流るゝ濁水を度して、彼岸に到るとゝふ義を喩へたる語なり。五蘊とは下にこゝに云ふ色受想行識を云ふ。此の字の意れば、身心の二つより然るに約めて詞書、色受想行識を蘊としも云ふ。下に注ふ如く、色とは受なれども、多義を包蘊して、蘊とは云ふなり。斯て其五蘊を皆空なりと照見徹底義なり。苦厄とは苦厄と二つなり。苦とは生老病死愛憎怨会別求不得なり。一切の苦悩をいひ、厄とは災難の義にして、水火風盗無数なり。一切の災厄を云ふ。度とは脱する義なり。凡ての文義は、自在智法を得もつて観ずる人、その深智慧の極妙覚を得もつと行する時に、其身も心も皆空なる理を照見徹して、生老病死愛憎怨会別求不得なる一切の苦悩、また水火風盗兵劫なれども一切の災厄をも脱れ、其は五蘊皆空の理をさとり徹り得れば、然る一切の苦厄は、こゝを超れ離れ、舎利子。色不異空、空不異色。色は即是空、空即是色。受想行識亦復如是。舎利子、仏弟子の中に、智慧第一と聞ゆる故に、此五が名を召びて、説聞せしる振に作威せり。色とは大きく形なりて見聚ぶき物をゝ云ふなり。仏経の常なりそは

形なりて青黄赤白黒等の色なきものをなきなどにかゝる外り。故是みては、即ちその身を云ふ。身形は空なる事れ、空は身形ふ事なり。丈義を、和ゞ身形は空とゝふ義をいて、色は即是空、空即是色とは云ふ事。然て受とは眼耳鼻舌身意なる物を體とする受納るゝ義なり。想とは行とはたこれひ、識はたるとは沙門を云ふ。此四つも納み形空丹野ならばとゝふ義なり。縮めて云ふ、身心の二つ外るゝ所と上ふ。舎利子。是諸法空相不生不滅不垢不浄。是諸法とは前文の五蘊を指して云ふ。空相とは不増不減。唯に空なる故なり。不生不滅不垢不浄不増不減なりは身心共に空なる故なり。相字に泥もなければ、文義は同じ然るを生滅垢浄増減なる物の如く思ふ惑ふを凡夫心ぞと云へる意れり。是故空中無色。無受想行識。空れる故に、大虚空中は、身心なく、身心なき故なり。無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。無無明。無無明尽。乃至無老死。亦無

老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故。此五十五字は上文に是故空中無色無受想行識とある中合蓋せる語なるを重複して繁冗なるを省きたり。心を平めて読む時は菩

提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠

離一切顛倒夢想涅槃。菩提薩埵とは菩薩の正語なるなり。既に云へるが如し。文殊も菩薩は右に

説く般若波羅蜜多智慧彼岸の行法に依るが故に心に罣

礙なく心に罣礙れなき故に恐怖の思ひ有なし。無所畏を得て無量の人衆の

る一切世間法は更なり。夢の如き妄想をも遠く離れて智

慧の極處を究竟せんとする知て顛倒夢想とは世間人衆の

所行所思を斷しめてこれを語なり。涅槃とは三世諸仏依般若波

羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提。此は阿耨多羅とは梵語なり

文殊は過去現在未来三世の諸仏も此般若波羅蜜多故知般

若波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等呪能除

一切苦真実不虚。般若波羅蜜多を此は般若波羅蜜多の法を行ずるなり。即下なる呪文を指せり。そ

は般若波羅蜜多の法を行ずるなり。即下なる呪文を指せり。そ

五蘊皆空の旨を照見して究竟涅槃に至る故なり。大神とは大明と

苦厄を脱離して究竟涅槃に至る故なり。大神とは大明と

いひ無上とは無等等は賛せるなり。諸仏は賛せるなり。故に

は此呪を唱へつゝ行ずれば一切の苦を除くなり。故に

と真実不虚なる故なり。故に説般若波羅蜜多呪

呪曰。羯諦羯諦波羅羯諦僧羯諦菩提娑婆訶。文殊は般若波羅蜜

多呪は右の如く無上神呪として一切の苦厄を脱離せし

むる呪文なれば今説く説くなる由なり。呪文は梵語なり。その説

者は仏祖なりとなり。意は澤に羯諦は度と訳する更なり。呪文は梵

語なるが澤に僧羯諦は僧と訳す。羯諦は度なり。羯諦波羅は度彼岸。度

彼岸と翻して此は仏道を云ふ。婆訶は速疾と訳す。澤に呪文は

と翻して此は仏道を云ふ。婆訶は速疾と訳す。澤に呪文は

彼岸の意は度彼岸に度れるは上に云へる。一切苦厄を脱して智

慧無覚の道に到れるなり。

以上は全文なり。熟く見よ。上に引く増一

阿含の空説と同しく。かゝる富那夜奢ら。悉皆空寂を。第一義諦と立つる宗義に能くも相應せず。然るを後世の註者ども或は般若の旨は空と非空の間を云ふと説くも有りと云ふは。謂為る新り無の見と等しきを嘆ひてなれど強説なり。眼耳鼻舌身意と云ひ、諸法空と云へるを何とせむ。惑ふこと勿れ。抑佛の心経の旨は。三世の諸仏の無上正覚を得し道として。此五蘊皆空と観じる汁是は誰もいと易く照見せれど。其は唯だ平常の人おても生滅しき倫はを甚く信じて。他をも勧め惑はしたが。多くるに執て思ふと。実も此文面の如く。一切の苦厄を度て除きて。虚空同躰と成るむふは。心安らる境き事の極形るが。五蘊皆空と観じる汁是は誰もいと易く照見せれど。其は唯だ平常の人の事まて徒事外れ。然るは仏祖を

仏としも称ふは。徒に照見せる事外りぞ。其道を得くる義あるに。何ぞ一切の苦厄を離れず。獨その道を愛して他道を憎むるや。何ぞ一切の苦厄を度て毒殺を受くるや。但し般若空寂の旨は。仏祖が説の古義と。今は姑く其偽説と部きて。然れど此説をも。仏説は託せる故を除くらむも。此旨を姑らく論ふなり。然れを仏祖繼弘め。馬鳴龍猛も。他道をば甚く憎み。ずに老も死もしきり。中ると龍猛を。髪の末に頭を刎てぞ死しりれる。此をしも一切の苦厄を度せりと云むや。然れで此空教ども。徒口にのみ説法して。仏祖。馬鳴。龍猛を度り得ぢ法なれど。況て其より以下の比丘らは言ふも更形。然るを今世に。某居士形ど自称して悟甚きぞ。此を自他とも。至て得らく法の

おと演説して。愚人を惑はし。彼岸に度れりと皃して。此世を
度るも多かるを。甚悪き事にぞ有ける。其ハ今し然る徒が
らを準も見たまへそ。其有様を知らゆ。阿波礼さる屎鵄の。果報
を好む徒をし。真雪ふる冬の夜中を赤裸にして。外に立しめたまへ捨はてゝ。一切
空と悟らせても。雪の霽赤は寒くおそあれしかどぞ云ハむかし
然しも寒からむ間は。彼岸に度ませりとも。五蘊皆空と
云憶らるゝに。此まもりしの比丘も。相類する言。云へりし如く所思
り。偕世の心経学者ども。此経は。かの大品般若中の。樞要を
撰び約たる物と。思ひするが多かれど。然るは非に。彼大般若
波羅蜜多経の初分四百巻は。却て此心経を敷演せる物
にて。其二分以下は。ましく其大要を。種々に作り改めたる物
なり。其由は。次品に每曲に。説辨するを俟て見るべし。

印度蔵志三十巻ハ吾師翁のことまに著はし業みそく
いまた草稿のまゝなるを近頃黒部の超ます由縁ありて四
人の有しみ示をもとにて此二巻を浄書せさせ
しを廿一廿二の二巻ハ有りまさるは詳ならす命をもて
写さしめしに悪筆のいやしきいかなるにや写しとある
事とも多くいやしく煩はしまはちまく校合しハ為彰に
わからなく漏しつゝ多かりれんくこともしらず

嘉永三年九月

六人部是香誌